

第1部 ねふたとは？

基調講演『ねふた～その起源と呼称』

講演者 弘前大学名誉教授 松木 明知 氏

<司会>

それでは『ねふたシンポジウム—原点回帰・ねふたの神髄を考える—』第1部の基調講演を始めさせていただきます。第1部のテーマは「ねふたとは？」です。講演に先立ちまして私の方から本日も講演をくださる弘前大学名誉教授、松木明知先生の御略歴をご紹介します。

先生は、昭和14年弘前市でお生まれになりました。昭和40年弘前大学医学部ご卒業後、大学院に入られ、麻酔科学を専攻されました。平成元年、弘前大学医学部麻酔科学教室教授、現在は弘前大学医学部麻酔科学名誉教授でいらっしゃいます。先生は、ご専門の麻酔科学、医学史のご研究の傍ら、津軽の文化に関連する事項についても研究されて来られました。「研究の目的は、真実の追求であり、さらにその成果が社会に正しく普及されることにある。真実の姿をどのように受け取るかは人によってそれぞれ異なるだろうが、虚構からは有益なことは何も生まれない。しかし、人々の間では誤った情報ほど素早く、そして広範に伝播される」とその思いを語られておられます。医学書、医学史書以外の主な著書には、お父様の松木明先生との共著「津軽の文化史」「八甲田雪中行軍の謎は解明されたか」などがございます。

またお父様の松木明先生の研究を引き継ぎ、長年資料を収集・精査し、科学的・民俗学的・かつ国語学的側面から核心に迫った1冊「ねふた～その起源と呼称」などがございます。

なお今日は大ホール入り口にて松木先生の著書「ねふた～津軽の文化史」などの販売がございます。ぜひこの機会にお買い求めいただければ幸いです。

それでは、お話を頂戴したいと存じます。ご講演のテーマは「ねふた—その起源と呼称—」です。松木明知先生、よろしく願いいたします。



<松木先生>

ただいま、過分なご紹介を頂戴いたしました弘前大学の松木でございます。

本日はこのねふたシンポジウムにお招きいただきまして、基調講演をする機会を与えていただき、大変光栄に存じます。関係各位に厚く御礼申し上げます。時間も少し限られておりますので、早速お話しします。

今日、前半は、ねふたという行事、あるいはお祭りといえは少し語弊があるのですが、それがどうして始まったのか、そして後半では、「ねふた」ないしは「ネブタ」というのでいろいろ問題になっていますが、その名称についていろいろお話申し上げます。私は、麻酔科の医者であります、なんでいろんなことをしているんだ？と疑問点をお持ちの方あるかもしれませんが、昔、医術とか薬がどうして日本に入ってきたか、ということの研究、日本に入ってくるルートとしてはいわゆるシルクロードですね、西はエジプトからずっとシルクロードを通ってきたと、それを少し私は調べておりまして、なかなか広範になるものですから各地域の専門の先生方のそのいろいろなお意見を聞かなきゃいけない。そういうことを先生方の集まる学会がございます。オリエント学会。この学会は、三笠宮様、ここにおられますが、がお創りになった学会。それで私はたまたま縁があつて第34回の学会を会長としてお世話することになりました。

3日間、宮様のお世話を申しあげたのですが、その間、民俗とか昔の風習とかに大変三笠宮様は関心をお持ちでございまして、ご承知だと思いますが、宮様は非常な考古学者でもあります。こんな厚い著書を何冊も出されています。それでその3日間の間にいろんな、ここの津軽の風習だとか民俗だとか文化とかそういう話をして、ねふたのことも当然話題になりました。

それでいろいろ説を申しあげて今まで流布している説をやったら、松木さんそれはまずいですね。松木さんは科学者だからきちんとしたものを親父の時代から資料を集めておりましたことも話したら、それだけのいろんな資料や文献を読んでおられるなら、ちゃんとまとめて本出したほうがいいですよ、と言われました。

当時私は、大学の医学部の教授で医療研究に忙しいものですから、ねふたの研究で本を出すようなことなんか、なかなかできませんでした。それで、定年で退職してから2年間かけてこの本を平成18年に出しました。以来、4年くらい経っておりますけれども、その間にいろんな論文を読みましたが、ますます私の説は強固なものになっているということだけ申し上げておきます。

今日、このエッセンスをわかりやすくお話申し上げます。

一番大切なことはいろんな起源だとかを論ずる場合は、きちんとした科学的な根拠に基づいてしなければならない。それからそのためには、まず以前にどんな研究があるのかということきちんとして、その研究が正しいのか正しくないのか、正しくないとすればどこが正しくないのかをきちんとして検証して、そして正しい事実だけを基にして自分の説を組み立てていかなければならない。ややもすれば従来の方々は、そういうことをしていなかった。

極端なことを言えば、思いつきでいろいろなことをしていたという、その代表的な例を挙げます。いろいろな説の提唱者のお名前を出しますけれども、決してこの人たちの人格を非難しているのではなくて、この人たちの提唱した説を否定しているのです。

日本では、そういうことをごっちゃにするからトラブルになる。私は説を否定しているんです。人格を否定しているのではないです。

有名な田村麻呂の説。田村麻呂は津軽に来たことがない。なおかつこれを書いてある本というのは、後でつくられた本。ですから、後の人が勝手にいろいろなことをしている。これは一種のお国自慢で、自分の国のことを古く見せようとする心理はどこでも働きます。ですから、これは全然当てにならない。

民俗学者の柳田國男氏もはじめから昭和10年あたりに、これは全然違う話だと言うことをおっしゃっていますが、なかなか郷土の人たちはこれを受け付けませんでした。



その次には為信が京都で大燈籠を作ったという、この説もあります。これは津軽変乱、このスライドにもありますように、津軽偏覧日記という、藩で、弘前藩で^{へんさん}編纂した資料にあるからこれは信頼できるという風に考えがちですけれども、これも編者自身を書いておられますように、当時あったいろいろなものを、言い伝えから何からまとめて、ごっちゃ混ぜにして書いたものだと書いてあります。



内容を1つ1つ吟味しなければならない。津軽の灯籠をつくったということなので、この灯籠というのは京都の周りの国々まで知られ渡った有名なものだと書いてありますけれども、文禄2年とか文禄年鑑の京都の公家の日記とかできるだけ調べましたけれども、全くそういう記事がない。もし、津軽の大燈籠として有名になったんだしたら、それが記録に残ってもいいはずですが。他の細かい事はいっぱい記

録に出てきますけれども、無いんです。ですからこれも間違いです。

こういうことは事実ではなかった。なおかつ、一説にこれは文禄2年ではなく、文禄6年だと書いてありますけれども、文禄6年という年号はないんです。文禄は5年までなんです。ですから、こういう資料も怪しいんです。怪しい資料を基にして論を組み立てるということは避けなければならない。

科学の研究ではそれはしてはいけないことなんです。もし文禄2年にあったとしても、なぜ最初に記録がねぶた、ないしは眠り流しとか、そういう記録が初めて出てくるのが、文禄2年から享保まで130年間空白があるわけです。この空白と言うのは説明できない。為信がもし文禄2年にやったとすれば130年の間どうしたのかという記録が何にも無い。やはりそれはおかしい。説明できない。で、この為信のこういうのもですね、創業者伝説、初代の人、先祖が古い方がいろいろやってきたという、そういうことですね。

例えば日本であつたら、神武天皇が、これも神武天皇のあれだとか、あれも神武天皇のあれだとか、そういうことがあります。創業者伝説、これもまた、一種のお国自慢のみたいなものでもありますけれども、それは仕方がない。人々の心理として郷土のことを良く見せようとか古くからあるんだ、由緒あるものだ、ということをしたいためにそういうのができていく。そういう心理と言うのは理解できないわけでもない。しかしそれは事実、真実とは違うということ。それかまた、ねぶたというのはアイヌ語だと解釈する人、一番古い方だと北里さんという方。ネブタとはアイヌ語であるという。スライドにありますように、ネというのは稲のネ、ブタというのは札の訛りだ。だからねぶたとはアイヌ語だ。アイヌとは狩猟民族で稲作なんかしません。何で稲作しない人が稲に札つけるんですか。なぜそういうことが起こるかというとなぶたという言葉だけ取り出してそれをなんとか解釈しようとするから、そういうことが起きるのです。

だから、物事と言うのはそこだけ取り出すのではなくて、全体との整合性をみなければならない。アイヌ語だと思ったら、なぜ享保年間の最初に記録が出てくるのか、説明ができない。

これ1つとっただけでこれは誤りだということがすぐわかる。

また最近では、佐藤さんという人が、眠り病、これ12世紀の証拠としてですね、病の草子というふうな絵と解説を書いた古い資料ですね、これは国宝になっているものですがけれども、こうやって眠り病ってなって、眠り病を流してやる、それで眠り流しというのが始まった、と書いてあります。で、これは真ん中で眠り病になっているんだ、としていますけれども、皆さんおかしいと思いませんか？

なんで眠り病で病気になっている人が装束ちゃんとして、はっきりしているのか。病人なら横に伏してなければならない。

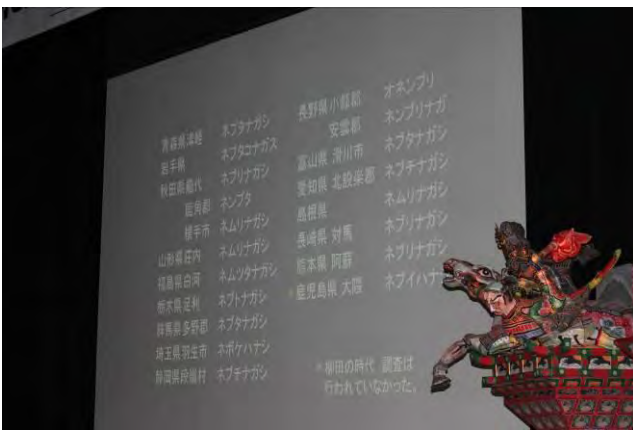
これは解説をよく読めば、なんかあればしょっちゅう眠りかけする男だと書いてあります。ただそれだけの話なんです。

日本では眠り病のような病が流行ったという記録はないんです。ですから、今までの説というのは全くの荒唐無稽だということがお分かりになると思います。で、1番正しいそして全国的な現地の調査ま

でしたのが、民俗学者の柳田國男さんの「眠り流し説」です。

明治39年に柳田國男というのは北海道の札幌に出張するときに、青森で7月6日にネブタを見て、それですごい関心を持って、それから約10年後に大正14年に「ネブタ流し」という論文を書いた。ただしこの中でも田村麻呂の説は誤りであるという、そこはいいんですが、文書の中では柳田國男自身も間違っています。それでいろいろ指摘を受けて、なおかつ20年間かけて全国に散らばっている柳田國男先生のお弟子さんの力も得て書いたのが、有名な1936年の「眠り流し考」。これぜひ皆さんお読みいただければわかるのですが、これは全国的な青森のネブタの行事というのは全国的な眠り流しの発展したものである、そして眠り流しと、七夕と、いわゆるお盆の3つを合わせた、一緒になった、それを習合したものであるということを柳田は主張した。

そして当時、全国的に、ねぶたと同じ起源を持っている行事の内容、それから時期、その他全て勘案して、同じ起源を持つものは全国にこれだけ柳田國男が調査したときにはこれだけあるんですよ。これだけ全国的にあるということは、眠り流しの行事がかつては全国に広がっていたということを示す証拠であります。



最後の鹿児島県のこれは、柳田先生の調査ではもれていたんですが、これは九州まで広がっている。これを皆さん見てですね、何か気がつきませんか？京都奈良中心の近畿地方にはないんですね。それは何を意味しているかと言うと、かつては京都奈良中心に眠り流しがスタートしたんだけど、時代が下がるにしたがって、そこでは廃れてしまって地方だけにこの行事、風習が残ったということの意味しています。

地方にあるほど古いものが残っているんです。新しい大都會では、物事が変化していったって、古い田舎では古いものが残っていく。このことはちょっと頭の中に置いていただきます。

例えば一番言葉で申しますと、奈良時代には日本では一般の人々がふあ・ふい・ふ・ふえ・ふおと発音していました。だから、京都ではそれはもう、どんどん変化していったってFの音がなくなって、使わなくなってHの音になってしまった。

ところが、京都からうんと離れた弘前、津軽では、その音が最近まで残っていました。私が小さいときは、在から来たお婆さんたちは「腹が減った」とは言わない。「腹（ふあら）が減った」「蛇（へび）」

とは言わず「蛇（ふえび）」。みんなそのFの音は残っていた。それから田舎に行けば行くほど、地方に行けば行くほど古いものは残っているということです。

これを見ますと、これだけ全国的な同じ起源のあるものが、アイヌ語では解釈できるわけがない。ましてや、為信が全国を走り回ってねぶたをやったわけでもないし、田村麻呂が行ったという説も成り立たないんです、これを見たら。すぐわかると思います。元々、眠り流しというのは、眠りとか睡魔とか、あるいは体にまとわり付いた穢れ（けがれ）とかいうものを体から取り出して、川に流していくということ。まあ、一種の禊（みそぎ）ですね。主にこれは子どもの無病息災とか健康を願って行われたもの、子どもが行ったもの。元々そういう思想というのは、穢れでなんとか邪悪なものを流そうというのが、日本全国に広まっていたと申しましたけれども、これは言葉で残っているんですね。

ぐっすり寝込むことは悪いことということで、柳田國男先生の調査の時には、長崎県の対馬、筑後、九州の方では、おやすみなさいをオイザトナットとか、イザトバイとか、オイザトウとか、これは目覚めが早いようにと、そういうことを言った。昔は農耕民俗でしたから、ぐっすり寝込んでしまうということは少し悪いこと。早く起きて、サッと起きて早く働くのがいいことだというふうに考えられていました。ですから、その痕跡として、今でも「お早う」という言葉を使うわけです。

そういうことを総合して考えますと、津軽のねぶた流しというのは、七夕祭と、眠り流し、七夕のお祭行事と、いわゆる眠り流し、禊の祓いの行事と、お盆が3つ合わさっている。

場所によっては、この中で例えば七夕の行事と眠り流しの行事の様子だけが結びついたのが1番左側にあります、7月7日に子どもたちが7回水浴して、7回食事するという風習が残っています。

岩木川の、一番最後まで残っていたのは、川原平とか砂子瀬ですね。私は昭和27年に、砂子瀬での行事で、マヤコという小屋を建ててですね、この行事をしているのを見たことがあるんですが、そこでは灯籠とかそういうことはないんですが、それがいわゆる七夕、眠り流し、そういう言葉は遣っていないですけども、七夕として残っている。で、弘前は子どもたちが灯の器、あるいはネムの葉っぱを持って、7月7日に水に流すと。弘前では大きい街ですから、その灯火の器がいつか灯籠に変化して、そしてその子ども達の行事に、時代が下ってから大人が参加して、その灯籠も大型化していった、というのが私の考えであります。

元来このねぶたというのは、子ども達が参加した、子ども達の行事だったということをお示しいたします。これは藩日記で、享保13年ですから、いわゆるねぶたが始まってから間もない頃なんです、これもいろいろ注意して、けんかしたりしたらダメだという注意なんです、ここ見てください。

「今晚弘前中、子供ねむた流し」だから子供の行事なんです。大人が参加したのは後なんです。だから大型のネブタなんていうのは、最初はそんなものなかった。後で申しますけど、子供が一人で持って歩くような、元々は小さな灯火を持って歩いた。これは子供のもっている灯籠を若い者が切り倒したということですけども。

もう1つもっと具体的に申しますと、これは、菅江眞澄という当時の旅行家、紀行家が寛政8年に木

造で見た様子を書いた。これは全く信頼できる資料です。

「わらはべ、をのれゝが手ごとに、燈の器をおもひゝ作りもて」おもひおもひ作っているわけですから、自分で簡単なものを作っている、というのがわかると思います。手の込んだものではないんです。

「てりかゞやかし、ふりかざし、みちもさりあへす」避けるほどできないほど、「よひより更るまで人のむれありくは、れいの、ねぶたながしなめり」と。

ですから、木造ですから、弘前から見たら田舎です。田舎では古い形が残ります。だから、古い形が残っていること、これは灯火の器、灯籠とは書いていません。だから灯籠から見たらより原始的なもの。それが本当のねぶたの始まりなんです。

今の菅江眞澄から十数年たった頃ですね。氷海散人という人がですね、本名はわかりません。これはペンネームですね。たぶん他国の人で、津軽に来て津軽の言葉とか風習に興味を持ってこの『俚俗方言訓解』という本を書いたんだと思いますが、津軽の方言に関する1番古い本です。「七夕祭を祢ぶたといふ、七夕の前三四日己前より此事有。色ゝ燈籠をこしらへ、子供のたわむれとす。」子供のたわむれ、子供の遊びなんです。「近年増長して皆大人のもて遊びものとなれり」と。

だから子供のものが時代が下るにしたがってだんだん大人が参加して、大人が大きな灯籠を作ったということがお分かりいただけだと思います。では、いつからそういうことが始まったかという、よくわからないんです。ただし眠り流しのいわゆる行事と、これはお盆の行事と同じように七夕とか、ずっと以前からあったと思います。間違いなくあった。しかし、記録ありません。なぜ記録にないかという、子供の遊びだからです。子供の遊びなんて記録に残ることはないんです。ほとんど残りません。これは1720年、享保5年に5代の殿様が、「報恩寺で今晚同所において」というのは、報恩寺でありますから、これは解釈難しいんですが、「眠り流しを高覧遊ばされ候」ということなんですが、これはですね、藩の日記を書く書記役がねぶた流しの意味をちゃんとわかって、これは眠り流しのことだと書いたと思うんですが、無理してやれば、「ねぶた流し」とこれをそう表現したものだと思います。

これは6日の晩、6日ですから。ある方は報恩寺の池に灯籠を流したと主張している人もおりますけれども、6日ですから水に流すということではなくて、灯籠をこの頃になりますと、単に子供たちが持っていた灯火の器というのは、そういう原始的なものではなくて殿様が余も見たいと思うほど綺麗なものになっていたと、変化したと思います。だから見たいと言ったんだと思います。

実際、具体的にそれが何であるかというのはなかなか解かりません。それが具体的になるのが、2年後の享保7年です。いわゆるはっきり「祢ぶた」という言葉が初めて出てきます。

ここで1番から8番までですね、ある方はねぶた8台出たと書いてありますけれどもこれは誤りです。なぜかという、何度も申しますように、子供たちが小さな灯籠を持って歩いたんです。ですから、この頃1番といったらこの本町あるいは親方町、鍛冶町、というのは本町、親方町、鍛冶町の子供たちが小さな灯籠を持って行列をやって歩いたということなんです。

今は、町内で1つ大きなねぶたを出すという考えでものを考えるから8台なんですけれども、そんな

ことはないんです。これは子供たちの行列なんです。それを誤解しないでください。

この殿様はなかなか見物するのが好きなようで、享保3年には、7月6日、槍の稽古、藩士の槍の稽古を見ている。5年は眠り流しを見ている。内容はここは同じだと。でもねふた見ているわけです。

お気づきだと思いますけれども、1年ごとになっていて、参勤交代でこの間に殿様は江戸に行っていないからですね。このスライドは何を意味しているかという、殿様が見るほど弘前の子供たちのもって歩く灯籠が見事になったということなんです。単に原始的な灯火の各自名々作ったような簡単なものであればわざわざ殿様が見たいと言うはずがない。殿様が見るほど見事なものになって発展してですね、今流行りの言葉でいえば進化してなったわけです。

なおかつ享保7年からは殿様は織座で、織座というところで見えています。織座とは織物職人の工場があったところで紺屋町にありました。織座について殿様が見て、そしてこの行列が紺屋町から出ているということは、これはおそらく見事な灯籠の発祥の地が織座であったと推察されます。もちろん証拠はありません。書いていません。

しかしそう考える根拠がいくらか、これからお話しいたします。当時五代の殿様がねふた見物したんですが、その前の四代の信政公というのは津軽の殖蚕の事業、産業を大変力を入れました。京都から織物職人を元禄時代にいっぱい連れてきました。元禄時代は京都の織物が最盛期を迎えた。元禄12年には、欲賀庄三郎とか、富江次郎衛門が来ていろんな調査して、桑を植えたりいろんなことをしていますが、その翌年には十数人の職人が京都から来ています。そしてさらに15年には一挙にこれだけの人が京都から来ています。

当時弘前市の市内は1万5千人、今でも旧市内は15万人くらいでしょう。当時の100人来たということは今に比例しますと1000人です。京都から来た高い技術を持った職人が京の都から来た。なおかつこの方々が流されてきたのではなくて、弘前藩でお願いしてなんとか来てくださいと言って来たから、一種のエリートなんです。この人たちが眠り流しに参加したと考えても当然でしょう。

当時、何にも娯楽がなかった。故郷の京都を偲ぶよすがもないわけですから。そうしますと、この人たちが織座にいたわけですから関与したと。なおかつこの人たちは京都の当時、西陣から来たと思います。当時、京都の西には町の数にして160、1つの町で100人いたとして、1万6千人、織物職人として働いていた。当時元禄時代は弘前藩の津軽屋敷というのはここにありました。二条城の少し南で東ですね。

このところに今でも津軽町として名前が残っております。ですから、ここから藩の役人がここに行って、ここを根拠にして西陣のところに行って弘前に来る職人を一生懸命探したんだと思います。その一生懸命やった責任者が野元道玄という方です。信政公が四代の殿様が辞を低くして野本を弘前藩に招聘して、彼が一生懸命、殖蚕の事業に尽力したわけです。

彼は京都の人で茶人だし、仮名草子の作者として、お茶の家元の村田珠光の先生みたいです。元禄6年、一説には元禄3年と言われておりますけれども、津軽藩に来て、弘前藩に来てですね、養蚕の技術

指導ですとか、織物職人を呼んだり、一生懸命努力したわけです。

彼は、ことのほか織物・養蚕に力を入れて、左の方に示したのは、野元が書いた「蠶飼養法記」という日本で最初の養蚕の技術指導書です。右の方は、新寺町の本行寺にある野元の墓です。小沢の方に野元村とありますけれども、これも野元道玄から取ったものです。この野元が、京都から来た人たちにとっては最大の保護者であります。何かにと、この職人たちは野元に相談したことでしょう。

もし先ほど言ったように、弘前で小さな子どもたちが持っていく灯火が灯籠に変化したのであれば、なんかのきっかけがなければそういうことが起きないというふうに民俗学者の柳田國男先生もおっしゃっておりますけれども、それが何であるかわからないと書いています。私はそれを変えたのは、野元道玄の死。死んだことが1つのきっかけでないかと思います。

道玄は正徳4年に死にます。一周忌が正徳5年、三周忌が享保元年、七周忌が享保5年、おそらく京都から来た人たちは野元の死を悼んでですね、お盆に盆灯籠をつくるとかという形で、ねふた祭り、ねふた流しに参加して見事な灯籠をこの時期に作った。だからこそ、急速に灯の器というものが灯籠に変化して、見事な灯籠に変化した。だからこそ、殿様が享保年代になってから自分も見たいという風にしたんではないかと思います。

そうしますと、なぜ藩日記とかそういうものに享保年代から、なぜねふたの記事がでてくるのか説明できるのであります。他の説では説明できないです。

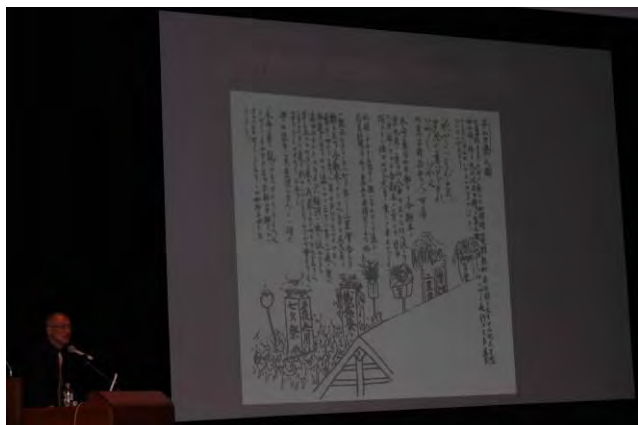
では、京都では盆の灯籠はどういうものかという、随分古い歴史がありまして、これは藤原定家、歌人として有名ですけれども、定家の「明月記」に出てきます。

1230年、随分古いですね。「近年民家、今夜長竿（長い竿）を立て、その鋒（ほこ）に灯楼の如きものを付け、灯を挙げるもの遠近にこれ有り。年を逐ってその数多し。」とある。ですから、京都の盆の灯籠は長い竿の端に灯籠がついているものという風に。この伝統がずっと伝えられて、例えば日次（ひなみ）記事というのに7月には1日から京都では盆灯籠として「截子籠、台灯籠、ホオズキ灯籠、草灯籠とか小行燈を売る。」とこう書いて、「是、皆中元、夜灯を点ずる所也。」このほかに、公家などの日記を読みますと、公家とか本願寺に献上した灯籠というのは誠に八島の合戦だとかさるかに合戦だとか見事な人形がついた灯籠なんです。ここに書いてあるのは、一般的な家庭ではこういうふう。なおかつもう1つは一般の家庭では灯籠を下げている。これは長い竿の先に灯籠がついて飾りものが付くという、これが京都の盆の灯籠です。

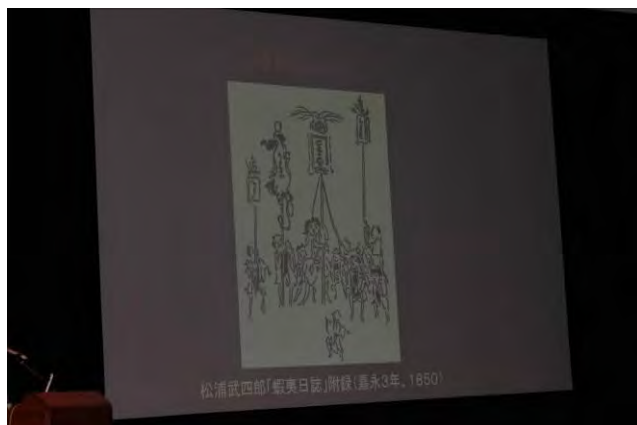
このことを頭に入れて次のこの記録を見てください。これは平山日記。ここの条だけ書かれた時期とか問題にしませんけれども、これは五代の殿様が、ねふたを見たということで、「色々品々之かざり物、灯籠等之細工見物なる事に而候」。だから殿様が見たのは灯籠に色々飾りものがついている。灯籠だけではないんです、飾りものが付いているんですね。

そしてこれは具体的にねふたを絵で示した1番古いものです。有名な比良野貞彦の「奥民図彙」はこれの中に描かれています。これを見てください。みんな灯籠は、長い棒に色々な様々な灯籠。これは大型

になりますと棒に付ける訳にはいきませんから、それでも飾りものが付いている。これも大きな灯籠ですから飾りものは付いています。少し小さい灯籠になりますと、棒の先に灯籠と飾りもの、このような感じです。これは1番古い。これは少し発達してきましたけれども、先ほど何度も繰り返して申し上げるように、小さな灯火が灯籠に変化して、それが少し大型化していったことを示しております。



この飾りものが時代を経るに従ってだんだん大きくなって、これは幕末の平尾魯仙の描いた絵ですけれども、こういう風な全くの人形です。これは下のところが灯籠で、人形ですね。こういう風に変化してくる。もちろんこの時代にはすでにいわゆる扇ねぷたも出てきていましたけれども、これは古い形のもので、灯籠の上にみんな飾りものが付いている。これはおそらく皆さん見たことはないと思いますが、幕末に北海道、いわゆる松前とか蝦夷地を、旅行して歩いた松浦武四郎が、函館で1850年、嘉永3年に函館のねぷた祭りの絵を残しております。



函館も随分津軽の人とか、あるいは下北の人が行って、おそらく津軽の人たちが行って、ねぷた祭りをやったんだと思いますけれども、皆さん見てください。その古い形のものを残していると思うんですが、長い棒、竿とか、そういうものに灯籠が付いて飾りが付いているものということです。これなんか、子どもの顔ですけども、実際どれくらいの高さのものなのかわからないんですが、そんなに大きいものではなかった。元々は子どもが棒の先に灯籠をつけて飾りものを付けた、それがねぷたの始まりだということをおわかりいただけたと思います。

もう1つ全くつけたしですけども、「ヤーヤードー」という掛け声を今弘前ではしますけれども、これもおそらくですね、ここのところ省略いたしますけれども、京都から来た織物職人たちが女の子た

ちの行列にねえやたちが付き添って歩いた、あるいはお母さんが付き添ったときに、女の子たちの囃し言葉に、そのねえやとかお母さんが、「サノヤア」という言葉を続けて発声したと。「サノヤア！」と。

比良野貞彦も「イヤイヤヨ」というようなことを書いていますけれども、江戸の人ですから、なかなかそういう言葉を正確に写し取っていたとは思われませんが、おそらく「サノヤア」がなまって、「ヤーヤードー」になったんだと思います。

当時、何度も繰り返しますけれども、当時は大きいねぶたを「ヤーヤードー」と言って引っ張ったわけではなくて、子どもたちが各自、小さな灯籠を持って歩いたわけです。だから「ヤーヤードー」という掛け声はですね、大きいものを引っ張る時の掛け声とかではないんです。これは少しまだ考えが必要ですが、一応このことはご紹介しておきます。

まとめにいたしますと、享保年間の初め、弘前ではねぶた流しの小さな灯の灯火が、灯籠に変化したと。この灯籠に変化したきっかけは、織座の人たちであったというふうに私は考えております。この灯籠をねぶた、行事そのものをねぶた流し、そして灯籠をねぶたと呼んだと思います。大変見事なものでありましたから、初めて殿様がそこで見たいということで、報恩寺で見たり、織座で見たりしたという。織座でずっと見物しているのは、織座がねぶたの発祥の地。

なぜ、発祥の地かと考えるかと、灯籠をつくって来るのは京都の盆灯籠、棒の先に灯籠が付いて飾りものというのは、京都の盆灯籠以外に考えられないから、やはりそこで京都の織座からきた織座の人々のことを考えざるを得ない。ねぶた流しと言うから、言葉からねぶたという名詞が生まれたと。

これがねぶたの起源に対する私の考えです。

次に、ネブタか、ねぶたか、ねふたかについてお話いたします。

「ネブタ」というのはですね、明治になってから、内藤官八郎と言う人が後半、明治一統誌というのを作ってから余計広まったと思いますけれども、「倭侮多」、「倭武多」と言う漢字を立てたのですが、これは間違っているわけですね。これで広まった。広まったのは、当時、県知事と言うのは明治政府の命令で東京から来ました。

そうしますと、方言と言うのは、蔑視すべき言葉である、非常に野蛮な言葉である、一時ねぶた禁止令なんかも出された。ねぶたは方言だから、ネブタの方が正しいんじゃないかということで、県から出ているものには、ネブタという名前になったりして、明治の15年から20年にかけてねぶた「倭侮多」というこの字を使った名前が増えてくる。それを引きずって、書いてありますように昭和55年に無形民俗文化財に青森から申請した「ねぶた」、弘前から「ねぶた」になったわけです。

当時、このことをよくわかってないから、こういう混乱が起きたわけですね。これまでの研究では、ねぶたが正しいんじゃないかと、その根拠としては、ねぶたとかあるいはカタカナでネブタとかそういう風にしたものが江戸時代には1つも出てこない。だからねぶたが正しいのではないだろうか、という説が大勢を占めておりました。私は、絶対信頼できると言うのは、書かれた時期がきちっとわかっている資料だけを用いてどうなっているか調べました。

一番信頼をおけるのは、書いた日にちとかそういうものがわかるのは、藩日記です。いわゆる御国日記です。これはいずれも基本的には「衾ふた」です。当時は、濁点につけない決まりでしたので「ねぶた」とも読めますね。基本的には「ねふた」です。この安永8年のねぶたについては後で申し上げます。基本的にはねふたです。

じゃあ、「衾(ね)」というのは漢字になっています。「ふ」とか「む」とかというのは、簡単に漢字にできるんですけども漢字にされていません。なぜ漢字にされていないのか、漢字化されにくい言葉だったからです。「た」というのは二字目が漢字化されないからそれに引きずられて漢字化されなかった。だから、「ね」は漢字、「ふ」「た」はカナカタないしはひらがなで書かれたわけです。だから、漢字化されていない理由というのは、私は漢字化しにくい言葉だったから文字だったからだと思います。

比良野貞彦もそうです。「衾ぶた」「子ムタ」と書いています。「ね」については、この「衾」とか子どもの「子」を書いています。2文字目、3文字目は漢字化されていません。これは字がわからなかったからではなく、漢字化しにくい。2文字目は漢字化されなくて3文字目はそれにつられて漢字化されない。半濁点「ぱ」「び」「ぷ」「ぺ」「ぽ」というのはですね、始まったのは元禄時代です。

一番最初にわかるのは、皆さんにわかりやすく言えば、近松門左衛門が始めたといったら語弊がありますが、簡単に言えばそう理解してください。作家ですから、浄瑠璃の作家ですから、役者が台本を読むときに間違えば困るから、「ぱ」「び」「ぷ」「ぺ」「ぽ」には濁点を打ったんです。当時は濁点を打たない。そこに濁点を打っていけば、「は」と書いて点打てば、「ぱ」なんですけれども、それは「ぱ」と発音すると言うことを、近松門左衛門がしたんです。

近松から20年ほど遅れた同じ浄瑠璃作家の紀海音なんかは、作品の中にはもう「ぶ」と書いて「ぷ」と読ませるといふところはいっぱい出てきます。

こういうことが「ぶ」と書いて「ぷ」と発音するんだと言うことが、広まってきたのは京大阪ではだいたい江戸ですね、明和の頃1760年。だから地方では、そういう知識というのは全然広まっていない。広まっていないんです。

それで先ほど津軽の方言に関する一番古い本、1809年のですね、「俚俗方言訓解」でなんと出てくるかという、「七夕祭りを衾ぶたと云う」。おっ、ここに濁点つけないところに濁点付いてるから、これは「ぷ」と読むんだ！と私も思いたいんですが、話はそう簡単ではない。

中の方を見ますと、母親のことを「あっぱ」と書いてあります。これはちゃんと半濁点を使っている。飽きやすいを「もちゃぺなし」と。頬のことを「ほっぺ」と書いてあります。ところがフキノトウ(ばっけ)のことを「者(は)」に丸が書いてあります。これはどんなことをしても「ばっかえ」ではないですね、「ばっけ」という。

だから半濁点で「ぱ」なんですけれども「ば」と発音する。だから混乱が起きている、半濁点の使い方にも混乱が起きているというのはお分かりだと思います。

尻の重いものは「しぶどい」、飯つき(おはち)ことは「じゅうばち」、たんぼぼなんかは「タンホホ」

って半濁点の知識があるんだから付けばいいんですけれども、付いていないんですね。たんぼぼなんて標準語に近いんだから、津軽の方言では「くまくま」というんですけれども、「すべりひゆ」は「だぶり草」なんですけれども、「たふり草」になっていますね。だから、混乱が起きている。

ですから、先ほど、ここにねぶたとあるから「ぶ」と読むんだというふうに簡単にはいかない。御国日記に、「祢ふた」とか「祢むた」とかってあるんですが、もし「祢ふた」なら、あくまでも「祢ふた」と書いて「祢むた」と書くはずがないんですね。「祢むた」なら「祢ふた」と書くはずないです。こう2通りあると言うことは「ふ」でも「む」でもないということなんです。

この2番目の奥民図彙でも、ねぶたとありますけれども、これは「ぶ」でも「む」でもないということです。「ぶ」は「ふ」の可能性もある。もし当時「ねぶた」と発音したなら、あくまでも「ねぶた」と簡単に書けるわけですから、それで通せばいいんですけれども、違う書き方をしていると言うのは、正式には「ねぶた」ではないということ。

菅江真澄の紀行文もそうです。そしてその他の資料でもそうです。ということは、「ふ」でも「ぶ」でも「む」でもそれ自体ではなくて、しかも共通している音を表しているということになって、これは「ぶ」しかないんです。当時は、濁音を使っていないとき、文書では濁音を使いません。だからそこで、もし濁音を使っていたら、それは特殊な読み方「ぶ」と読むんだということも申しましたけれども、津軽の弘前藩の藩日記には1箇所だけ「ぶ」と書いてあるのが安永8年の御国日記です。これは「ねぶた」とあります。これは間違っただけで点持ってきたんじゃないのは、ここにも「ねぶた」とあります。

間違いなくこれは、当時は「ぶ」と発音した紛れもない証拠です。当時江戸時代ではねぶたという言葉はなかったんです。これは「ねぶた」と発音する。これは皆さん誤解しないでください。さらに、決定的な証拠をご覧に入れましょう。これは幕末に百川邦之助という人が、弘前から江戸に行って英語を勉強してフランシス・フォークスという人が書いた黒船のペルリが日本に来たときの紀行文を翻訳したということで許可願いを藩当局に出したものです。ここに、ペルリのことをベルリと書いてあります。間違いなく「べ」と書いて「ぺ」と発音したという証拠です。繰り返しますけれども、説明申し上げますと、ねぶたの「ぶ」、あるいはカタカナでもそういうものが書けなかったから、半濁音の記号を知らなかったから「ふ」と書いた。そのため藩日記とか奥民図彙では「ねふた」と書いた。あるいは「ぶ」と書いたり、それを「ぶ」と表現した、それは当然「ねぶた」と書いたことになるわけですね。そして津軽の人は、非常に鼻音を含みますので、他地方の人から見れば、「ねぶた」と発音しているんだか、「ネンプタ」に聞こえるみたいですね。

その鼻音に入ったのを余計、比良野貞彦なんかも「ネンプタ」と書いていますけれども、「む」と書いたのは、鼻音の「ん」とか「む」とかを「む」と表現して「ねむた」と書いた。

この記号はですね、言語学では別の難しい記号を使うんですが、わかりやすくこういうふうになりました。だからこれでなぜ「ねふた」と書いたのか、「ねぶた」とあるか、「ねむた」とあるかお分かりいただけだと思います。「ねぶた」か「ねふた」かというのは、ここ300年間に津軽の方言に大きな変化

はありません。たとえば、他国から殿様が全然入れ替って、他国の文化が入ってきたとかそういうことはありません。

したがって、津軽の私たちが話をしている津軽弁には大きな変化はないんです。津軽では最初から行事としてはねぶた流し、そして持って歩く灯籠はねぶたと発音した。「ぷ」の表現の方法を知らなかったから、「ぶ」の変わりに「ふ」とか「ぶ」とか「む」が用いられた。

明治時代になって、ねむたの「む」をこの字で書いて、この武者の「武(む)」を「武士」の「武(ぶ)」と間違っただけのために、「ねぶた」という名前が生まれたということです。

これが最後の51枚目のスライドですが、ここにはねぶたを製作に携わっている多くの方がおられると思いますけれども、繰り返して申しましたように、ねぶた祭の本当の起源とか本質というのは、ここに書いてありますように、子どもたちの健やかな成長と無病息災を願う行事なんです。それが弘前という大きな土地でやるお祭りに発展してきました。

しかし、お祭りに発展してきても、本来のその行事の本質は無病息災を願う行事なんです。その無病息災を願う行事に、悪い意味の「佞(佞)」の字を用いてる。なおかつこれは「ねい」と発音するので「ね」はないんです。なんで健やかな成長を願う祭りに、縁起の悪いこの字を使うのでしょうか。

私は陸奥新報に2回書きました。もう、こういう字を使うのはやめましょうと。1つも反応がない。弘前の人には私も含めて非常に頑固で他人の意見を聞かないと言うのが津軽の特徴だそうです。

しかしこれだけは皆さん、やめてほしい。今年のねぶたからですね、この佞(佞)の字だけはやめていただきたい、ということをお願いして私の基調講演を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

第1部 ねふたとは？

特別対談『弘前ねふた VS 青森ねふた』

津軽錦絵作家協会 会長 三浦 香龍 氏

ねふた絵師 竹波比呂央 氏

聞き手 2010 弘前ねふたコンテスト審査委員長 山本 和之 氏

<山本>

皆さん、こんにちは。このコーナーの聞き手を務める山本と申します。

昨年の弘前のねふたの審査委員長を務めさせていただきました。

このコーナーはですね、「弘前ねふた VS (バーサス) 青森ねふた」というふうなたぶんなっているんですが、松木先生のお話を延長で考えると、どちらも「ねふた」というのがやはり正しいような気もするんですが、それよりも何よりも、VS、バーサスっていう対決を意図してしまうところに、実は弘前と青森の大変な対抗意識が表れているわけです。ただ、我々これからお二人のゲストをお迎えして対談をしていくわけですが、これは決してバーサスということではなくて、それぞれの特徴、違いをより鮮明にしてお互いのねふたのこれからの更なる発展のために意見交換をしていこうということでもありますので、そういう内容で進めていきたいと思っています。よろしくお願いします。

さて、それでは今日のお二人をさっそく紹介したいと思います。紹介しながらそれぞれの作品をこのスクリーンに一つずつ映し出したいと思っておりますので、よろしくお願いします。

まず、今日青森からお越しいただきました竹浪比呂央さんであります。ようこそいらっしゃいました。

<竹浪>

こんにちは。竹浪比呂央です。よろしくお願いいたします。

<山本>

1959年、木造町、今のつがる市のご出身、生まれでありまして、その後東北薬科大学に進まれて薬剤師としてずっと活躍されています。30歳で初の大型ねふたを制作して、2000年、2004年、2005年とねふた大賞を受賞されました。そして2010年1月、つまり去年1月には青森市内に竹浪比呂央ねふた研究所を設立しました。あの三角形の建物の…

<竹浪>

アスパム。

<山本>

そうですね。ちょうど手前側といますか、南側に白い建物がありまして、そこが研究所。そこでねふたの創造と研究をしながらもグループ展に出展するなど、ねふたを紙と灯の造形とみなして新たな可能

性を追求し続けていらっしゃいます。現在、「あおり灯と紙のページェント」これは八甲田丸のところですよ。青森駅前では来月13日まで開催中。

それから県立美術館では来月20日まで「青い森に連れてって 色・形・音のインスタレーション」という企画も今、出展中ということでございまして、今日お越しいただきました。ちなみにこの作品は平成18年の知事賞。別にこれでいきなりこれで喧嘩を売るというわけではないんですが、これはじょんがら節ですね。黒石市の要するに浅瀬石城の。ちょっとそここのところだけ説明してもらってもいいですか。



<竹浪>

じょんがら節の発祥、これに関連して常椽和尚という人がいらっしゃったんですが、その人が最後の奮戦をするという場面を描いたということですね。

<山本>

ということは、右側にいるのはひょっとして為信さん…？

<竹浪>

ではなくて…

<山本>

津軽藩の武将ということですか。

<竹浪>

ええ、そうです。

<山本>

ああ、そうですか。常椽和尚が身を投げて、最後追い詰められて身を投げて。そこが川原、じょんからの名前ということで、そういう伝説があるんですが、こういうねぶたを作っておられます。平成18年度の知事賞を受賞したねぶたです。後程ゆっくりとお話をお伺いいたします。

<竹浪>

よろしくお願ひします。

<山本>

そして、もう皆さんお馴染みでございますが、弘前を代表して三浦呑龍さんです。よろしくお願いいたします。

<三浦>

三浦です。本日はよろしくお願いいたします。

<山本>

私の方からご紹介申し上げます。

昭和27年生まれ。私と同じ年の生まれですが、辰年ですね。学年が僕の方が早生まれで上なんです、それはそれとして、弘前市生まれ。昭和50年、ねふた師の先駆者である故石沢龍峽先生、日本画家としても初代錦絵作家協会会長としても活躍されました。その龍峽先生に師事されまして本格的にねふた絵の制作に取り組みました。昭和46年から大型ねふたの絵を手掛けて、これまでに400台以上を制作していらっしやいます。

現在は津軽錦絵作家協会第6代会長、それから昭和54年から国立民族学博物館、これは大阪にある博物館ですが、呑龍さん制作の大型ねふたを展示中。

そして昭和58年、NHK紅白歌合戦に出演したねふたを作りました。さらに、大河ドラマ「いのち」というのが、この津軽を舞台にNHKで放送されましたが、それに関してもねふた関連の美術を担当されました。加えて平成7年、平成8年、東急日本橋アートギャラリーにて「津軽錦絵三浦呑龍展」が開かれました。

そして平成9年、大阪御堂筋パレードに100団体の弘前ねふたが参加したパレードがあったんですが、その中で人気第一位という名誉ある地位に輝きました。それから今年の2月、来月から、東京渋谷の東急デパートでやはり「津軽錦絵三浦呑龍展」個展が開かれることになっております。お忙しかったですね。400台も作るというのはすごいと思いますが。ちなみにこの絵は、去年の市役所の福利厚生会のねふたでございまして、もう、パッと見た瞬間に三浦さんの絵だということが分かるんですが、その秘密なども今日は解き明かしていければいいなと思っております。

よろしくお願いいたします。



<三浦>

よろしく願いいたします。

<山本>

お二人がどんな話をされるかというのは大変興味深いのですが、実はですね、松木先生の方からねぶたの歴史、あるいは呼称も含めて詳しくご紹介がありましたけれども、実は弘前…あ、津軽弁でやったほうがいいって、ごめんなさい、すみません。

津軽衆だということで津軽弁で話させていただきます。どうしてもマイク持てば共通語になって迷惑してしまって、カニしてください。弘前の人は意外に青森のねぶたの歴史を知らないんじゃないかという気がいたしまして、今日は竹浪さんにちょっとそのことをご紹介いただくというふうに思っています。実際、町内会のねぶたもあるんですよね、青森って。

<竹浪>

もちろん、あります。

<山本>

我々は主に大型ねぶたを見るんですが、地元の人はずっと違う楽しみ方をしているということなんで、その辺りからちょっと現状を教えてくださいませんか。

<竹浪>

はい。今ちょうどスライドにあるのが、今純三さんの…。

<山本>

昭和3年。

<竹浪>

そうですね、戦前のねぶたの様子でありますけれども、昔は今みたいに大型ねぶたとか子供ねぶたとかいう区別なしに、青森も町内会だとかが主体で。それから大工さんとか左官屋さんとか、そういう組合とかですね、そういう職場の慰安といいますか福利厚生といいますか、そういうことで大小様々なねぶただったということなんですね。特徴的なのは戦前のねぶたは一人担ぎの担ぎねぶたなんですね。それを3人の人が竿で支えてということで100台以上も出たという記録がありますね。それが県庁の前にはずらっと並んでということなんでしょうけれども。戦後結局、青森は大空襲に遭いまして。

<山本>

これ昭和3年なんですけど、刺又とかササラとか、弘前ねぶたでも伝統と言われる道具類ですね、ちゃんとやっぱり青森もそれは継承しておられたということですね。

<竹浪>

ええ、もちろんそれは。ですからそんなに大きな違いはこの当時はなかったかもしれませんね。

<山本>

一人担ぐっていうのをさっき松木先生のお話から類推すると担ぐ灯籠の話をされていたので、その流れ

を汲んでいるということも言えますね。

<竹浪>

ええ、流れを汲んでいるんでしょうね。ただ、決定的に青森と弘前の大きな違いというとハネトの存在という。

<山本>

すでに昭和3年の時点で子供たちが。なるほどね。

<竹浪>

それは青森の町の起こりというか、町の発展してきた様子、それに関連してくるんですけどね。

<山本>

次の写真。これが昭和7年の青森のねぶたです。基本的に大正時代から昭和ずっと遡っていくまでこのような形態だったと考えられているんですが、大きさも含めて皆さんで見ただけであればいいんですが。これが要するに一本の竿で担ぐということなんですよね。で、四方から支えて運行しているということに青森はなっておりました。

<竹浪>

正面に「官許」って書いていますよね。今でもねぶたになぜか「許可」ってつけますが、松木先生のお話にもありましたけれどもねぶた禁止令なんてありましたから、ちゃんとお上の許可を得てますよという「官許」という、これは青森も弘前も共通でしょうけれど。

<山本>

次の写真を見せて。さっきは昭和7年です。これは昭和22年です。ここの間にずいぶん大きさも変わってくるし、人も変わってくるし、年数も変わってくるんですが、大きな違いが一つあるんですよ。さっき竹浪さんがおっしゃった空襲を受けた後、戦争を挟んだということなんです。

<竹浪>

空襲を受けまして、焼け野原で、全く衣食住足りない状態。けども、青森の人というか津軽の人は「ねぶたねばまいね」ということで、もう既にその翌々年、昭和22年にねぶた出してるんですよ。このころはもう担ぎではなくて台車に乗せた今のねぶたのような形ですね。これ日通のねぶたですね。

<山本>

曾我五郎兄弟の場面ですけれども、よく知られた場面です。ちなみに昭和20年に青森の空襲が、7月28日にありまして、焼け野原になりまして、21年に戦後復興計画がスタートする。

つまり敗戦から1年経つや経たずのうちにねぶたが実は、その時にもうスタートしてるんですよ。これはすごいですよね。

<竹浪>

はい、そうなんです。食べるものもない、住む家もなくてバラックを建てなけりゃならない、その木がねぶた作りに使われているっていう、これがすごいですよね。

<山本>

すごいですよね。昭和22年、この年ですが、ちょうど戦災復興港祭りという名前でねぶたがこういうふうに登場してきて、それがだんだん大型化していきながら昭和33年に港祭りが青森ねぶた祭りに名前が変わるといふ。竹浪さんに伺ってエッと思ったのが大阪の万博に出てるんですよね。あれからまた一段と変わってくるわけでしょう。

<竹浪>

1970年の、いわゆる大阪の万博、昭和45年ですけど。その時に岡本太郎の太陽の塔の下のお祭り広場に青森のねぶたが、いわゆる展示とかではなくてまるごと囃子もハネトも全部行って、そこで祭りを再現したと。その影響で観光客が右肩上がりですごう伸びてきたということなんですね。

<山本>

ですから、青森のねぶたには戦後復興という大きな再出発の意味と、つまり復興のシンボルであるということと、万博という日本が戦後から立ち上がる時の万博への出展によって大型化、観光化という色彩をそこでものすごく強く帯びるといふ、この二つの歴史の側面を今もずっと引きずっているというふうに考えていいですね。

ということで、だいたい青森のねぶたを少し皆さんにご紹介したんですが。さて、次いきましょうか。青森と弘前というどうしても、比べるのはねぶたではなくて観光客の数なんですよ。何百万人って、そっちがいつもより50万人多いだとか、せこいところでこう争ってるんですが、実は、作り手としてはそれぞれどういうふうに見てるのかということをお聞きしたい。ではまず、三浦吞龍さんに、青森のねぶたというのはここがいいよねとか、ここがうらやましいよねとかという点って感じておられますか？

<三浦>

うらやましいということとちょっと違うかもしれませんが、私はねぶた絵を描いているというところほとんど自分の家で籠って描く。絵を描くまでなんですよ。

団体の方に引き渡すとそこで自分の役目はほとんど終わり。造形的なものは、ねぶたの骨組みとか照明とか、それはまた別な部分で、全部が関与できるというわけではないんです、私らの立場は。引き渡してあくまでも終わり。

それと、描いている自分というの一人なんで、ちょっと孤独ですよ。

その点、私も実際、青森のねぶた作っている場所は拝見したことはないんですけども、写真とか雑誌等とかに竹浪さんとか載っているのを見させていただいていますけれども、ある程度スタッフ的なといふか、そういう雰囲気の中でやられているのはいいかと。

それから仕上がりがだんだん見えてくる。中に照明を入れながら紙を貼っても描割の段階では中に照明を入れて具合を見ることができるでしょ。こっちは一発勝負なんで、ちょっとその辺心配だといふか、そういう気持ちをずっと引きずっていくのがちょっと違うかなと思っております。

<山本>

孤独じゃないのがいいなど。だんだん見えてくるのがいいなど。ちょうど、竹浪さんから制作過程の写真をお借りしているので、これがさっき言ったアスパムの向かいにある研究所のプレートなんですね。これ、ねぶた大賞を取ったそうですね。

<竹浪>

はい、そうです。

<山本>

2000年のねぶた大賞のこれが下絵、まず下絵を描きます。どういうふうに作っていくかというのをこれからちょっと皆さんにご覧頂きます。次どうぞ。こうやってやるんだそうです。針金で、腕？

<竹浪>

そうです。鬼の右腕ですね。最初に顔の位置を決めて腕の位置を決めてという。いわゆる、造形作家が、芯を作って手足のデッサンを考えながらバランスをとってつけていくという。

<山本>

ちょっと次々に見せてください。手ですね。

<竹浪>

これは、左手ですね。

<山本>

ここになるともう、何がどうなってるんだか、分からなくなるんだ…。

<竹浪>

この背中が私だというのはお分かりいただけると思うんですけども。ちょうど鬼の顔の真ん前にいるんですが、もうわかんないですよ。

<山本>

はい。わからないですね。次お願いします。

<竹浪>

これは紙貼りです。基本的に上から下へ貼っていきまして、紙を貼ってくださるスタッフはほとんど女性の方が多いんですけども。こういうふうには背中の上、ちょうどこれは鬼のこの辺、ボノゴのところに上がって貼っているという。

<山本>

つまり、紙貼りさんとおっしゃる、いつもこの時期になると来てくれる、アルバイトでやってくれる主婦の方々。常連さん。

<竹浪>

そうです、そうです。

<山本>

では、次お願いします。

<竹浪>

これは貼り終わった段階ですね。左の手の方から、奥にあるのが鬼の顔になりますけれども。

<山本>

では、次どうぞ。

<竹浪>

これは貼り終わった鬼の顔ですね、はい。

<山本>

はい、次どうぞ。

<竹浪>

これは墨が入って蠟が入ったと。この辺は弘前の皆さんも当然お分かりでしょうけれども。

<山本>

まず蠟描きをしてその次……

<竹浪>

いや、まず墨を書いて、その後、蠟ですね。

<山本>

では、次お願いします。

<竹浪>

これは、灯が入った鬼の顔ということで。

<山本>

はあ～。では次どうぞ。

<竹浪>

これも、墨ですね、最初は。

<山本>

はい。次どうぞ。

<竹浪>

これが、色を仕上げたところになりますけれども。

<山本>

はあ。色付けというのは、筆もしくは刷毛。

<竹浪>

はい。それから今で言うエアブラシ。

<山本>

エアブラシ。

<竹浪>

ええ。コンプレッサー使ったの。

<山本>

顔は何かご自分で丁寧に刷毛とか筆とか・・・。

<竹浪>

顔も、ほとんど私はエアブラシですね。

<山本>

はあ。そうですか。では次お願いします。

<竹浪>

これが、台上げと言いまして、弘前のねふたで言えば絵貼りって言うんですか、これは団体さんが、せいのって持ち上げて台の上に乗っけるわけですよ。

<山本>

これ、波の部分ですよ。

<竹浪>

これは送りの波の部分ですね。

<山本>

要するに、部分部分で作って、それが1つの台に乗って、くっつけて1台ができる。で、どうぞ。

<竹浪>

で、これが完成という。

<山本>

はあ。「ねふた大賞」というふうに書いてあります。ありがとうございます。あの、孤独じゃないというのは本当にそうだなというのはよく分かると思いますが、要するに…

<竹浪>

でも、基本孤独ですけれどもね。

<山本>

あ、そうなの？

<竹浪>

え。これ最終意志決定は私ですのでスタッフは・・・この鬼の手を伸ばすのか曲げるのか、これも全部私ですから・・・

<山本>

それは誰も手伝ってくれないんだ。

<竹浪>

そうそう。そういう意味では孤独は孤独ですけれども、作業自体は呑龍さんのように一人籠ってという

ことではなくてですね。

<山本>

なるほど。さて、一方で、竹浪さんは弘前ねぶたってやっぱりいいよなっていうのはどういうところでしょうか。

<竹浪>

私はとにかく子どもの頃からずっと絵が好きで絵を描いていまして、私は実は西郡の木造町、現在つがる市ですけども、ここはやっぱり弘前の扇ねぶたもあり、青森式の人形ねぶたもあるという。

<山本>

混じってる。

<竹浪>

はい。うちの町内の隣の町内は、毎年弘前の方に扇を描いてもらってたんですよ。ですから節堂さんの絵も龍峽さんの絵も達温さんの絵も、今は地元の人が描いていますけれども。ですから本物の弘前のねぶたを小さい頃から見育てたんですよ。

<山本>

はあ。そうですか。

<竹浪>

ですから、青森のねぶた作ってますけれども、弘前のねぶたも実は大好きで、特に大きいでしょ画面が。あの真っ白なキャンバスに一気に、下絵は作るんでしょうけれども、描いていくというか墨をぶつけていくという。やってみたいなと思うんです。

<山本>

ちょっと見てみましょう。呑龍さんの、これは冒頭にお見せしました。次です、はい。これは茂森新町で去年の知事賞だったと記憶しているんですけども、昼間に撮った映像です。当然見送りがあります。見送りをどうぞ。これは『津軽藩伝説雪女』というタイトルがついていて、灯が入ります。しばらく見ていたくなりますね。描いてみたい。

<竹浪>

そうですね。

<山本>

はい。これはですね、坂田金時ですね。坂田金時の土蜘蛛退治。

<三浦>

土蜘蛛退治の場面ですね。

<山本>

上が土蜘蛛で、坂田金時って金太郎さん？

<三浦>

金太郎ですね。

<山本>

この構図っていうのは、上からこう蜘蛛が襲いかかってくるというのは、すごい迫力があるんですけども、どこをポイントに？

<三浦>

主役が1番目立つ部分なんで、金時は真ん中に持ってきたいという意図があって。あるいは中心として動きが出るようにっていう、渦巻くような動きがないと迫力に通じませんので、その辺のところは多少意識して考えております。何回も何回も試行錯誤して。

<山本>

そうですねえ。次に鏡、見送りを、次ちょっと見せて。夜の見送りですね。

<三浦>

結局、浮世絵とか先輩の描いたものとか、前に描いたものとかいろいろアレンジしたり、参考にしたりとか、いろんなパターンがございます。

<山本>

わかりました。竹浪さん、青森には見送りというか、そでというか、そでを描く…

<竹浪>

そでも昔、描いて付けていたねぶたもあったみたいです。私も3年位前、平将門というねぶたを作ったときに、後ろに額を作って、そこに滝夜叉姫という送り絵を、粗末なものなんですけれども、ちょっと描きたくなりまして、弘前風の送り絵っこを一つ描いて貼ったことがあるんですけれども。

<山本>

どうでした？

<竹浪>

まあ、自分ではいいなと思ったんですけれども。

<三浦>

ぜひその写真でもあったら、機会があったら見たいですね。

<竹浪>

よろしくお願いします。

<山本>

これから絵はどんどんご覧いただくので、次に進みましょうか。やはり、もちろん弘前は絵が良くて、描いてみたい、ぜひそれは描いていただきたいと思うんですが、青森、弘前それぞれに伝統ってありますよね。伝統って一口で言ってもなかなかピンとこなかったりするんですけれども、大変重いものだろうというふうに我々は傍観者ではありますが見てしまうんですが、作る側にとって伝統ってどれくらいプレッシャーになっているのかって、ちょっと聞いてみたいと思うんですが、呑龍さんどうですか？

<三浦>

プレッシャーは結構感じるんですけども、というか弘前自体がもう伝統文化的なねぶたなんですよね。というのは、描いている自分よりも、観ている市民、観客の方が、ねぶたには詳しい方もいっぱいいるだろうし、その辺はどれくらいの、絵に対してですよ、ねぶた祭の中の絵に対して関心持っているかっていうと、私自分ごとなんですけれども、3月まで市の博物館にいて、7月恒例の弘前ねぶた展ありますけれども、2年続けて1番最初に入ってきたのが3、4歳くらいの同じ子でしたね。

おばあさんの手を引っ張って、始まると同時に。市民会館の辺りからもう博物館の入り口が見えるんですけども、おばあさんの手を離して走ってくる。その子が2年連続で1番乗りで入って行きました。そういうお子さんとか、デイサービスの80、90くらいのお爺さんとか、お婆さん、20人位の車椅子で来られて、最後の特別展示室という天井高いところに自分で企画したんですけども、半立体ねぶた、灯を入れた、レリーフみたいな。ねぶたの囃子も流しておりましたので、そこに皆さん来られたら、1人のお婆さんが曲に合わせて「ヤーヤードー」って言ったんですよ。

そしたら他のおばあさんも「ヤーヤードー」って言って、全員で合唱して「ヤーヤードー」始まったんですよ。出て行かれるときにも介護の職員の方に話しかけて、「今日は良かった。冥土の土産にできた」って。まだまだ頑張っていただかなきゃいけないんですけども。

そういうふうに小さい頃から一生肌に染み付いているところが弘前のねぶたの良いところかなと思いますし、結局自分の描いた絵も10人中10人でなくとも、見ている人がいるので、そういう人の気持ちに伝える、そういうことを考えるとやっぱり中途半端なことはできないし。

さっき松木先生がねぶたの歴史のことを言われておられましたけれども、大きな変化というのは、明治に入ってから弘前では扇ねぶたができた、定着した。それが何かっていうと、ここは城下町だし、市民の気持ちに合ったんでしょうね。三国志とか水滸伝とか。

だから、半端な見方をしているんじゃないかと、そういうのに憧れるっていうか、血飛んだり生首飛んだりするのも、古来、変な人は粹だっていう捉え方もしますので、そういう要素もすごく大事なところなんですよね。それをいろいろ、ねぶた何台か描く中にできるだけ入れて、同じものは被らないようにとか、そういうようなこと。プレッシャーというか、そういうことを大事に考えております。

<山本>

では次の絵を。これは市の博物館に保存されている絵ですが、竹森節堂さんです。こういう絵でした。皆さんも見たことあると思うんですけども。ねぶたの扇の形も含めて、ねぶた絵の構図も含めて、竹森さんがこう定着させた。次お願いします。色使いが一目で違いますよね。石澤龍峽さん。三浦呑龍さんの御師匠さん。もうなんと言っていかわからない、この黄色、橙色、オレンジっていうのでしょうか。色使いが、最初の節堂さんは、赤と緑が基本。龍峽さんになると、黄色・水色・橙というのが、それを表に出してくるというのはそれまでなかった。

<三浦>

ええ。色の塗り方も重ね塗りという技法もあって、例えばオレンジの上に赤をぼかすみたいなの、また深みが出る。龍峽先生の場合は重ね塗りという技法をよく使っていたと思います。

<山本>

続いて、ねふた和尚といわれた達温さん。もう三人三様でこれまたすごい迫力で。達温さんの強さというのもすごいですねえ。

<三浦>

本当にこう、灯が入ったときに目がらんらんと光るといふか、その蠟の効果というのはかなり計算しておりますし、線が太いですよね。これ離れてもはっきり絵が見えるようにという、そういう効果を狙って描かれてたと思います。

<山本>

今、3人の名人の絵を見てきたんですけれども、それぞれに顔料っていうんでしょうか、絵の具っていうんでしょうか、それも変わってきたりしているんでしょうか。

<三浦>

基本的には同じ染料を使っていると思いますが、塗り方とか色の使い方、好みもあるでしょうし、その辺の違いだと思いますけれども。

<山本>

これは要するに、三浦さんは小さい頃から見ていた。

<三浦>

そうですね。

<山本>

このねふたが目の前を歩いていった。すごいどきどきしたと。

<三浦>

そうです。私、物心ついたというのは、昭和27年生まれですので、大体30年の辺りっていうのは、すごい子どもながらに強い印象が残っているんですけれども、この3人というか、先生方は、今でも雲の上のように思うんですけれども。

<山本>

子ども時代のドキドキ感とはどういうものだったんでしょうか。

<三浦>

明らかに心臓がときめくような、息が荒くなるような感動というんですか。そういうのを記憶しておりますよ。

<山本>

竹浪さん、そういう気持ちわかりますか？

<竹浪>

ええ、それはもちろんわかりますね。あっちからねぶたが来るっていうだけでもドキドキっていうかザワザワっていう。

<山本>

じゃわめく？

<竹浪>

はいはい。

<山本>

そういうふうにじゃわめきながら、呑龍さんは実は高校卒業してすぐに大型ねぶたを描くんですよ。それが次です。18歳ですよ？上手ですね、としか僕は言えないんですけども。いやたいしたもんですね。今とは違うんですか？今見てどうですか？18歳。

<三浦>

基本的にはずっと引き継いでるものもあるんですけども、やっぱり稚拙だというか、とにかくこのねぶたが大型ねぶたの最初でしたので、描けるといううれしさというか、楽しんで描けたというか、要はあまり周りで期待していないわけでしょ、最初の作品ですから。

<竹浪>

これまだ呑龍さんという名前の前ですか。

<三浦>

前です。ですから、周りで思っている以上のものが描けるんじゃないかとか、そういう気持ちで描いておりました。

<山本>

なるほど、わかりました。一方の青森ねぶたの伝統ということを次に伺っていきたいんですけども。

<竹浪>

はい。

<山本>

冒頭に、青森空襲からの、戦災からの復興と、もう1つは大型化、観光化のきっかけとなった万博というような話をして、その流れでもって今に至るといようなお話をしましたけれども、とは言っても冒頭で見た今純三の絵もそうですが、脈々と伝統はあるわけですよ、青森も。

<竹浪>

ありますね、はい。

<山本>

それはどんなふうにねぶた絵師として考えていますか。

<竹浪>

製作者として作るって時には、特別伝統ということは私は意識しないんですけども、良いものを発表

したいという思いで作るわけですけれども。ただ、やっぱり戦争で焼け野原になってしまってなんにもないのに、まずねぶたださねばまいという…

<山本>

小屋作る前にその木をねぶたさ使ってしまう、という…

<竹浪>

はい。そういうねぶたに対する思いっていう、これ脈々と青森の人たちはあるわけですね。これは弘前も青森も変わらないだろうと思うんですけれども、まず直接伝統というものを意識して作るわけではないですが、我々が今作っているねぶたがずっと続いていかないことには、この祭りも成立しないでしょうし、このねぶたを無くしたくないという思いで行けば、いいねぶたを作ったくさんの皆さんに喜んでもらって、理解者を増やして、そしてこれからの若い人たちをどんどん育てていかなければならないな、という風な想いがありますし、それから作り手、製作者というだけでなく、一市民としてねぶた祭という文化にしっかりと参加して、その祭りという伝統をきちっと守っていかなければならないというふうには思います。

<山本>

19番出してもらえますか。これは去年ですね。『天孫降臨猿田彦』ということなんです。三浦さんすいません、私はちょっと勉強不足なんですけれども、「天孫降臨」とかそういうのって、弘前の鏡のタイトルになることありますか？

<三浦>

あんまりないですよ。

<山本>

ないですよ。

<三浦>

いわゆる、三国志でいうと関羽とか趙雲とか有名どころ。水滸伝になると、いっぱい人が数多く出てきますので、割とメジャーなところは狙ってやっております。

<山本>

そのこと、頭の隅っこに入れていただいて次の写真。これは戻り橋ですから、おそらく弘前ねぶたにも出てくるテーマです。一生懸命私は青森のねぶたの伝統を調べようと思ってこれまでやってきたねぶたの映像とタイトルをずっと調べてみたんですけれども。自由ですね。変な言い方をすると。

<竹浪>

そうですね。

<山本>

これが伝統ですね。たぶんね。今思っている自由というか広さというのを。

<竹浪>

要するに青森のねぶたってというのは誰が決めたっていう訳でもないんですけれども、とにかく中に灯が灯った紙でできた造形物であって、それで色を施して発表するということですから、こういう題材はいけませんよとかそんなことはないわけでありまして。ですから例えば、十字軍の遠征とかそういうものでもいいですし、実際にこれは中国、それから、弘前でもそうでしょうけれども、インドのお釈迦様の伝説とかそういうのもありますけれども、どこからとってきてもいいんです。ただ青森の伝統というのは、カラクリ人形みたいにねぶた自体が動いたりとか、電球がちらちら散ったりというのはどうしても敬遠されがちですよ。ですから、どっしりとして、それ自体は動かないんですけれども、次の動作を想像させるというか。

<山本>

そこは同じですね。一瞬を捉えるというか。

<三浦>

動かないんだけど、動きを感じさせる構図というか、その辺を試行錯誤して何回も何回も繰り返しやっているところなんですけどね。

<山本>

空海とかですね、蒙古襲来とかですね、神武東征とか、海王冥王、ちょうど冥王星海王星の順番が変わった年があったと思いますが、その年は海王冥王というのが、御師匠の千葉先生がお作りになって。つまり弘前ねぶたでは考えられないタイトルとテーマが、どんどんどこ自由に出てくるというのは、これは伝統といえば伝統かもしれないというふうには私は思いました。この戻り橋は、もちろん弘前でもよくあるんですが。さて、思えば青森の自由さに対する弘前のって振り返って考えたときに、私はすごくなくなにか、三浦さん、歌舞伎とか浮世絵とかいわゆる日本画の江戸庶民の楽しみ方みたいなものがすごく津軽藩ただだけに染み込んでいるところがあるのかな、というふうな気がしたんですよ。青森の題材の自由さに比べたら。どう思われます？

<三浦>

三国志、水滸伝といっても実際は題名的には半分ぐらいですか、今年あたり80何台出てますけれども、三国志・水滸伝が半分で、あとは日本のものとかいろいろパターンはあるので、それにこだわってというのではなくて。でも私としては水滸伝・三国志にはこだわりたいんですよ。出てくる人たちのキャラクターってというのは、すさまじいものがあるし、それは弘前のねぶたにふさわしい、合っている所も確かにあると思いますよ。

<山本>

次はすごく難しいコーナーにいきましょう。そういう中で作家として新しさというのは一体何か、という、すごく難しいと思います、これは。言ってみれば、特に弘前ねぶたという場合は、水滸伝、三国志は半分くらいあとは他で、というところである種イメージが出来上がっていて、青森ねぶたでいえば動かなくて、光のいたずらもなくどっしりと構えていて形の伝統ってあって、どこにどういふものを新しく

継ぎ足していくのか、すごく難しいような気がするんですけども、何なんでしょうね、三浦さん。新しさ、自分なりの個性、新しさというものは。

<三浦>

新しい感覚っていうんですかね、なかなかそういうのは、素直にぱっと出てくる場合もあるし。下絵の段階で80%、90%決まるので、前のイメージ、前作のイメージとか去年までのイメージとかあるので、それはずっとみなさんの中に残って。

<山本>

それは逆に言うと、皆さんがそのイメージを求めているということが前提にあるんであって、逆に言うと自分らしいかどうかというとまた違うことでしょうね。

<三浦>

そうですね。逆に、ねぷたっていうのはあくまで客観的だと思うんですよ、祭りという形態をとる中に入っていくものですからね。決して主観、自己満足の世界ではなくて。奇をてらってもだめだし、ある程度その伝統というんですか、その中で新しい感覚を入れていくというのは具体的に言えないんですけども、すごく難しいところではあります。

<山本>

次の写真見せてもらってもいいですか。これは下新町ですね。その新しさというのがどこかから探してみようと思うんですけども、九紋竜ですね。9つの竜を入れ墨しているんですよ。それが大活躍するという場面ですが。じゃあ次の写真。すごい細かいというのがわかるでしょ。これは入れ墨を中心にやるんですけども、手が抜けないっていうと語弊があるんですけども、すごい細かいところまできちっと描いているんですね。

<三浦>

これ写真なんで、私なんか目が悪いんでちょっとはつきり見えないんですけども、要は入れ墨をどう表現するかっていうのは何回も描き方を変えて先に色塗ってから、肌の色を塗ってから、墨書きしてっていう描き方をしたり、それから蠟の点で区切ってから描くやり方とか、いろんなことを試すっていうか、それこそ灯が入ってねぷたになるものなんで、実際ねぷたになって灯が入って、出てこないと効果がわからない。ある程度頭の中で予想してやるんですけども。前にやったところを反省しながらとか、今回変えようとかいろんなことを。

<山本>

正直言って、目の前を通り過ぎていくところに、ここまで細かくきちっと見るだけの余裕がなくてですね、写真を見て改めてびっくりしたんですよ。

<三浦>

本当に今は特に台数も多いし、合同運行っていう中でねぷたが目の前を通り過ぎていきますので、昔は気に入ったねぷたがあったら付いてじっくり見に行ったり、小屋に見に行ったり、そういうのはじっく

り見る機会があったでしょうから。今はぱっと見ですからね。なかなかその辺、難しいところではあります。

<山本>

次の写真を見せてください。これは土手町の去年のものですが、おやっって私、正直言って思いました。すごく直線が。

<三浦>

どうしても日本武者、三国志の中国武者のイメージからすると、曲線的なのと鎧の直線的なのとの違いっていうか。

<竹浪>

これ為朝ですよ。

<三浦>

為朝です。保元の乱という。

<山本>

では次、見送り。ちょっとびっくりしましたね、これは。『雪之丞変化』

<三浦>

昔よく東映とかで。ねぶたの題材としてあれなんでしょうけれども、映画観に行ってそのイメージがあったんで。

<山本>

そういう結びつきですか。

<三浦>

結構、前の鏡絵と見送りの繋がりっていうのは関連性があった方が、より良いとは思いますが、後ろこれ描きたいと言ったら、そで絵と見送りの脇の部分ですね、それと見送りとの繋がりを最低限関連付けて。芝居小屋の火事みたいな感じで。

<山本>

康楽館ですからね。

<三浦>

いろいろ、そういうようなこと考えてますよ。

<山本>

竹浪さんは、弘前のねぶたが良いって時に、その作家の個性ってそでに出るんじゃないかっていうようなことをお話になっておられたと思いますが、これをご覧になってどういう…。

<竹浪>

すごいですよね。鏡絵っていうのは、伝統をお描きになったものを自分なりに味付けしてということが、繰り返し出てくるようなところもありますし、また全くオリジナルものをお描きになる場合もあると思

いますけれども、そで絵っていうのは、絵師といいますか、作家さんの個性というか、まともに出るっていいですか、いわゆるねぶた絵じゃない部分ですよ。

<三浦>

主観的な部分も若干入っている。

<山本>

ちょっと教えてもらえますか。鏡っていうのは、ある程度伝統というか、そでっていうのはそのところが少し許される。

<三浦>

許される部分ですね。題材がわりと限られているようで広いんですよ。いろんなものがそで絵として可能性があるってことなんです。昔は龍とか虎とか狼とか、弘前のねぶたのイメージもあったし、ただ、今ですと結構自由にと言うか。

<山本>

私は正直ビックリしました。これ見たときに、うわあって。

<竹浪>

ですから、私は今日本当に緊張しているんですけども、小さい頃から呑龍さんの大ファンで、ずっとねぶた絵を拝見してきたんですけども、そで絵にいろんな日本画とかいろんな人の絵をモチーフにして、三浦呑龍風の味付けでという。たとえば河鍋暁斎があったり、川端龍子の河童の絵があったり、それから狩野芳崖があったり、円山応挙があったり、たまには全く正面の極彩色とは反対に全く水墨で、墨一色でとか。それから、この額の送りから幽霊かなにかが飛び出したのありましたよね。

<三浦>

あれは、前の年に大きいねぶたが流行ったというときがあったんで、いかに目立たせるかっていうのも自分のテーマとして考えたりしたということもあったんですよ。

<竹浪>

そで絵を見るのが非常に楽しみで、ずっと見ていました。

<山本>

やっぱりわかっている人から見るとそでに個性が出るというのはそういうことなんです。よくわかりました。では、今度は青森ねぶたの新しさ、というところを見ていきたい、お聞きしていきたいと思いますが。この次です。これが平成17年にねぶた大賞、それから製作者の最優秀賞、製作者賞を受賞した『小川原湖伝説』なんです。これをお見せするには2つの意味があって、もちろん新しさっていう視点と、そのために何をやるかっていうことが1枚の絵に込められているので、竹浪さんに教えていただこうと思います。

<竹浪>

このねぶたは、実は今、東北町ですね、合併する前の上北町、小川原湖の伝説をモチーフにしているん

ですけれども。この正面に出ています「青森菱友会」っていう三菱グループの団体なんですけれども、ここのねぶたですと私20年以上お世話になっているんですが、平成6年から、郷土の題材、伝説や民話、あるいは歴史、ゆかりの人物、こういうのをねぶたで取り上げて、遠大の方、あるいは青森県の方にも、ここにはこういう風なお話がありましたよ、ここにはこういう歴史がありましたよ、ここにはこういう伝説が残ってますよということをやりたくて、ずっと以来この団体は三国志、水滸伝、それから日本の武将っていうものは一切なしに青森の伝説の発見というか、青森再発見というテーマでやってきました。一昨年は弘前にも大変お世話になりまして、「為信の卍錫杖の由来」という、築城400年を先取りして、市役所の皆さんに資料等々大変お世話になったんですけれども。

<山本>

次の1枚。「阿部比羅夫、津軽深浦に立つ」っていうことで、これはもう2作見てわかるように、弘前のねぶたではできないような、この題材の幅の広さ、地元の歴史を掘り下げていって、それを表に出していくという、この活動ですよ。これは深浦の人たちも呼んでやったというのを聞いて、僕はビックリしたんですけれども。

<竹浪>

これは、深浦町史、深浦町の町の歴史、分厚い歴史。どこにもありますけれども、市史だとか県史だとか。深浦町史が1番最初に日本書紀から引用してきて、深浦町の東の浜というところに阿倍比羅夫がやってきたと。その時に武力で制圧するのではなく、話し合いでもってその蝦夷と津軽蝦夷が仲良くなってそこで大饗宴をしたという話があって、その話なんですよね。これを知らべるのにまず町の教育委員会とか、そういうところに行って資料をお世話になって。そういううちにこういうねぶたがありますよっていうと、その町の人たちが大変熱くなりますので、じゃあぜひお祭にいらっしゃいということで。このときも町長さんはじめ来てくださいます。

<山本>

深浦のPRもその場でできますよね。はあ〜すごいですね。これは今後ともずっとやっていきたいということなんですか？

<竹浪>

そのつもりでおりますけれども、なかなか題材になるようなお話が。例えばすごい話でも、女性が主人公であったりとか、唐糸御前の伝説なんかはちょっと、ねぶたにはなりにくいようなんですよね。最後悲しいお話だったとか、やっぱりある程度勇ましくて、元気が出るような題材の方が。

<山本>

呑龍さんがさっきおっしゃったことでは、例えばその節堂さんの絵を間近で見てドキドキして、それから達温さんの絵を追いかけるように見ていくというのを考えれば、つまりこういう「阿倍比羅夫、深浦」とか、子どもたちが見ると、そういう意味で強烈にインプットされるということでしょう。

<竹浪>

ですから私も歴史の教科書で習う前にねぶたからなんですよ。加藤清正とか、それから風雲児信長。織田信長って知らないで風雲児信長って、タイトルになっているから知っているんですよ。それぐらい津軽の子どもたちはねぶたのインパクトは大きなものがあると思うんですよ。そういうときに、地元でこういう伝説がありました、こういう歴史がありました、ということは社会科の教科書で学ぶ以前に、こういうものを吸収できればいいのかなという想いもありまして。

<山本>

なるほど、すごいですねえ。その新しさという意味でもうちょっとだけ呑龍さんにお話をお伺いしたいんですけども、新しさと同時にねぶたの悲しさって言うのも、苦労の1つで一期一会っておっしゃいますね。

<三浦>

ねぶたは7日、8月1日から弘前は7日までなんですけど、最後は川に流してやる、そういう禊の行事だっていうお話ありましたけれども、正にそうで、消耗品なんですよ。いまだとそれでも、剥いだねぶた絵を保管している団体さんも結構あるみたいですけども、基本的には雨も降りますし、完璧な形ではそんなにねぶたは残らないっていうか、その年だけのねぶたっていう。そういう意味では見ている人の記憶に残るだけの絵なんですよ。できるだけ強い印象を持って、このねぶた、役目を終えてもらいたいというのが私たちの気持ちなんです。そういう意味で一期一会だっていう。

<山本>

そこに1年かけて。

<三浦>

今年を引きずらないっていうのも、美しいものだと思うんですけども、そういう見方すればね。次また新しいねぶたが来る。ただ今年のこれで終わり。でも何年か経ってあのときのあのねぶたって記憶に残る絵であつたら自分としては嬉しいことなんです。そのために描いている。

<山本>

竹浪さんも全く同じでしょ。

<竹浪>

全く同じですね。青森の場合は絵でないわけですから、大きな重機でぐしゃっと潰してしまいますから。

<山本>

そんな荒っぽくやるんですか。

<竹浪>

はい。解体の日って言うのは、時間が2日くらいしかないものですから、台から引き摺り下ろして、それをぐしゃってやって終わりですから、直接そのぐしゃってやる現場には立ち会ったことはないですけども、

<山本>

立ち会えないですよ、悲しくて。

<竹浪>

基本、それですから、来年はまた新しいねぶたに出会える。まさに今、呑龍さんがおっしゃったように一期一会の、そういう気持ちですね。

<山本>

なるほど。わかりました。時間も押し迫ってきましたが、最後にお聞きしたいと思います。いろんなお話で作者、あるいは絵師っていうしんどさとかもある程度は想像できるんですが、さあよいよ祭だと向かっていくときに、ドキドキしますよね。たぶん自分の作品ですから。どんなときが一番血圧上がるかっていうのをちょっと教えていただけないですかね。

<三浦>

先ほども前半にちょっと触れたんですけども、私の場合は絵を描くっていうというので、照明とか別個の問題で、また運行のときにどういう風な姿で出てくるかっていうのは想定できないというか、それでまたねぶたがよく見えたりするわけでしょうから。土手町に毎年、ねぶた始まりますと、毎日見に行きますよ。土手町も、駅前コースも。ねぶたがどういう感じで出てくるのかなというのが、できてしまったから安心だという、決してそういう楽しみだということで見に行くわけではなくて、ドキドキはらはらで、雨も降ってきますよね。今年、去年、一昨年、3年くらいねぶたが始まると雨が降ってくる。どこか自分のねぶたが来るときのいい環境で来ますようにとか、そのように思ったらいけないんでしょうけど、そういうこと気になりますよ。

<山本>

例えば、ねぶた小屋を作って、6月下旬くらいから、中で我々は昔の骨組みの掃除をしたり、お囃子の稽古とかもしていくんですけども、紙貼りっていう時までわからない、どんな絵か。幹部の人たちは知っているのかわからんですが、それは待つ側が今年どんな絵が来るんだろうということもあるんだろうけれども、出す側としても本当にこれで、みたいなところは。そこのひと夜がすごいですよね。

<三浦>

明日取りに来るとかって電話かかってくると、もう1回ねぶた広げて最終チェックみたいになっているんだけど、あれ、これでよかったのかなとかって思うときがあるんですよ。これ灯入ったらどうなるんだろうかと思ったりして、ちょっとねぶた持ち上げてみたりして、違うんじゃないかとかって気になって描き直そうかって。実際、描き直したこともありましたしね。そういうジレンマというか、かなりこう…

<山本>

弘前ねぶたに関してで言えば、描く側も小屋で待つ側もその一瞬で、すごいドキドキそれを待っているわけ。

<三浦>

それは貼ってしまえばもう1回というわけにはなかなかいかないでしょうから、その前までがすごく、そういうジレンマというか。

<山本>

夜も眠れない日があるのかなとか想像しましたが、竹浪さんはその血圧がピークになるときはいつ頃なんですか。

<竹浪>

3回くらいあるんですけども。

<山本>

3回もあるんですか。

<竹浪>

7月後半、まず私たちの場合は、台上げて決まっています、つまり台に乗っける日、大安吉日を選んだりとか団体さんの都合もありますし、1人2人で上げれるもんじゃないですので、5、60人集めないといけないですからその人たちの手配とか、その人たちのお弁当とか全部手配していますので、なにがなんでも7月27日といったらその27日の朝にはできていないとだめなわけですよ。

<山本>

それは要するに手配する側の、プロデューサーとしての血圧。

<竹浪>

その日に間に合わせるということが大切なわけですよ。ちょっと1日延ばしてくれないか、ということは無理です。その台上げの日っていうのはだいたい5月末か6月には決まっているわけですよ。ですから納期が決まっていますから、それに間に合うかどうかという、まず肉体的なプレッシャーで、7月の後半、なかなか大変なときがあるし、あと精神的にはやっぱり1番は、台上げの日が1番ハラハラドキドキですよ。下において作っていますから、明かり入れたりとかはチェックできるんですけども、あれが2m近くの台の上に上がって下から見たときに、果たして視線がちゃんと……

<山本>

それは部分部分で作って、想像できているようだけど、紙貼りと同じような緊張感はものすごくある。

<竹浪>

絵を貼るのと同じようなのはありますね。

<山本>

ああ、絵貼りだね。

<竹浪>

しかも小屋の中というのは大きいように見えて、2、3mしか離れていませんので、台の上に乗せて5m、10m離れてみたときに、果たして右と左の武者の視線がピタッと合っているとか、それは想像するんですけども。

<山本>

それは後でちょっと直してとか、できないこと。

<竹浪>

できないですね。

<山本>

それは血圧上がりますね。

<竹浪>

その日なんかはいくら疲れていても、何か気になって朝早く目が覚めてしまいますしね。

<山本>

なるほどねえ。

<竹浪>

まず天気が気になりますし、小屋から出してやりますので。今日は雨大丈夫かなとかですね。

<山本>

ご苦労が多いことですが。もう、これでそろそろ時間ですので終わりにしたいと思います。どうぞこれ消してください。いずれにしても、もうお二人とも製作には、今年の夏に向けてもうお忙しい時期ですよ。

<三浦>

もう、頭の中を整理して、今年の描くものは。

<山本>

大体構想はできあがっているのでしょうか。

<三浦>

はい。

<山本>

もう、部品、部分というのは作り始めておられるんですか。

<竹浪>

例年よりちょっと遅れ気味なんですけれども、構想はまとまっていて、今1部、手とか足とかそういうところには入っています。

<山本>

そうですか。これからまた、我々はまだねぶた祭、ねぶたまつりというのは感覚的には夏だと思っているんですけれども、今もう、明日から夏みたいな立場におられますが、これからもより一層良いねぶたとねぶたを作っていただけますように、よろしく願いいたします。最後に実際にそれぞれのねぶたを運行している状態は見たことがあるんですか、ありますよね。

<三浦>

はい。毎年、毎日。青森はまだ。5、6年前に海上運航のイベントのときには見させていただいたんですよね。

<山本>

これを機会にそれぞれの交流も深めていただければありがたいなと思います。また今年の夏も期待しておりますので、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

<三浦><竹浪>

どうもありがとうございました。

<山本>

ありがとうございました。

第2部 全国に広がるねぶた文化

パネルディスカッション「日本各地で行われている“ねぶた”大集合」

パネリスト 北海道斜里町総務環境部企画総務課 主事 川島 雄司 氏
群馬県太田市産業観光部商業観光課 主任 井上 真希 氏
埼玉県北本市市民経済部産業振興課 主査 加藤千鶴子 氏
神奈川県秦野市環境産業部観光課 主任主査 佐藤 剛 氏
コーディネーター (社) 弘前観光コンベンション協会 専務理事 今井二三夫 氏



今井 自己紹介を兼ねて、なぜねぶたをやるようになったのか、今の現状はどうなのか、そしてまた、そこから出てくるような問題も合わせながら発表していただきたいと思います。

斜里 北海道斜里町役場企画総務課の川島と申します。斜里町は北海道の北東の一番端、知床半島のオホーツク海側に面している町です。世界自然遺産となった知床を擁する町です。産業は農業、漁業、観光の三本柱、これが主な産業となっています。

弘前市と斜里町の間には友好都市の盟約が結ばれています。そのことがきっかけとなって、現在ねぶたが運行されるようになりました。盟約が結ばれたのは、昭和58年2月です。そして、同じ年に第1回目のねぶた運行が実施され、昨年、平成22年で28回目の運行を行うことができました。今から200年以上前の1807年に津軽藩士が斜里の警備に当たった際に冬の厳しい寒さ、そして栄養不足により100名の津軽藩士のうち72名が亡くなるという歴史がありました。この盟約の結ばれる10年前、昭和48年に津軽藩士殉難慰霊碑を建立し、慰霊祭を続けてきたことが契機となり、友好都市の盟約が結ばれました。

平成22年の祭りは、7月23日金曜日と24日土曜日に開催されております。毎年7月の第4金曜日、土曜日に運行されることとなっています。ですから、弘前と違いまして日にちが

毎年動いていきます。そして、このねぶた運行の一日目の日中ですね、午前10時から毎年、津軽藩士殉難慰霊祭が開催されているところです。

それではステージ上にスライドを映していただいているのですが、次の写真をお願いします。これは運行前の出陣式の様子です。場所は役場の庁舎の南側の駐車場です。ここが運行のスタート地点となっております。ねぶたの参加者についてですが、斜里町では14団体、参加者が2日間で延べ約2200名参加しています。斜里町の人口は約12800人となっておりますので、毎日町民の約1割がねぶたの運行に参加しています。このような規模ですので、役場の南側の駐車場に参加者が全員一纏めに集まることができています。これは斜里のねぶたの運行の良い所なのかなと思っています。この写真はそのステージ上から撮った写真となっております。

じゃあ、次の写真をお願いします。これはステージ上なんですけど、平成22年の運行に弘前市長さんとたか丸くんが参加して、出陣式を迎えることができました。

次の写真をお願いします。これは運行の様子の写真ですが、役場の駐車場を出て、スタートしたところです。先程も述べましたが、斜里のねぶた祭りは7月の第4金・土曜日に運行されています。弘前のねぶたまつりは8月1日から始まるんですけど、この時期は弘前の皆さんも大変忙しい時期に当たるんだと思います。このような中で弘前市の方々、観光コンベンション協会の方々、商工会議所さん、このような団体の皆様にも斜里町にお越しいただいて、運行されているということは町長始め、斜里町として本当に感謝しているところです。

次の写真をお願いします。これは運行が進んで、町の中にねぶたが進んできたところです。ねぶたの運行コースは、役場を出発しまして商店街の通りを通過して、斜里の駅前、そこでUターンして、同じコースを通過して役場まで戻っていくという約2キロのコースです。このねぶたが開催されている期間中は、知床夏祭りが同時開催されています。商店街のイベントが行われていたり、また弘前の物産展も同じ時期に開催されていますので、町の中が活気づいている様子です。

次の写真をお願いします。これが最後の写真になりますが、斜里町にある一番大きいねぶたの写真です。高さは8mあります。このねぶた本体も弘前市から平成5年に寄贈されたものです。このねぶた絵は先程対談された錦絵作家協会の三浦吞龍先生の絵です。このねぶたが斜里のねぶたの一番最後を飾るものとなっております。以上が斜里の運行の様子となっております。ありがとうございました。

太田 群馬県太田市役所商業観光課の井上と申します。太田市はスバルの富士重工の工場があるということで工業都市として発展した町であります。現在の太田市は平成17年3月に3町と合併しまして、新たに太田市となったわけです。

なぜ太田市でねぶたを行っているかということですが、先程お話しした合併した時にですね、その町の中の1つに旧尾島町があります。太田市のねぶたは元々その尾島町でやっていた夏祭りのものでした。旧尾島町の夏祭りという昔はですね、盆踊り、八木節、花火といったありふれた納涼祭だったんですけども、小さい町ということもあり、マンネリ化や高齢化、少子化等もありまして、お祭り自体の人手がだんだん少なくなってきました。こうした背景からお祭りを何とか盛り上げようという意見が多くなってきておりました。その時にですね、弘前市の青年会議所のメンバーの方が、弘前市で行われた講演会の中で群馬県尾島町に江戸時代、津軽藩の飛び地があったという史実を知りまして、是非その地に行ってみようということで昭和60年に尾島町を訪れるということがありました。それがきっかけとなりまして、弘前市と尾島町の交流が始まり、友好の印として昭和61年から尾島町の祭りにねぶたが登場することになりました。その後、尾島町でも独自にねぶたを作る企業、団体も増えまして、尾島のねぶたということで発展していき、平成7年から正式に尾島ねぶた祭りと言前を変えまして、昨年で24回目を迎えることができました。

現在、どのようなやり方でねぶたが行われているかということですが、現在は毎年8月14、15日の2日間、尾島ねぶた祭りを開催しております。出陣団体は、大体15から16団体。参加団体の多くは企業が母体となっている団体で、弘前市のように市内の地区が中心となっているような団体はほとんどありません。開催場所については、太田市の中にある国道354号

の一部区間1.5キロくらいを通行止めにして、その中で運行しています。弘前市のねぶたまつりのようにスタート地点、ゴール地点が決まっている一方通行の運行ではなくて、交通規制をかけた1.5キロを往復するように運行しています。また、祭りの最後に、交通規制をかけた中央の部分に交差点がありますので、その交差点に各団体のねぶた、太鼓が集合して、ねぶた囃子の合奏というも行っております。ここが弘前市にはない、一番の違いだと思います。また、平成20年から太田市にも10尺ある大太鼓を作りまして、最近では、この大きな太鼓を見に来る観光客も増えております。

それでは、なぜねぶたがここまで続くことができたかということなんですけども、まずは弘前市と友好都市を太田市も結んでいますので、その様々な交流を行っている中で、その中心を担うねぶた祭りを太田の地で終わらせてはいけないということがあげられます。また現在、太田市の夏の風物詩の代表として、ねぶた祭りが大きな観光資源となっております。僅か1.5キロの道路に2日間で約15万人ぐらいの観光客が訪れております。こういった大きな観光客が集まるのは、太田市ではねぶた祭りだけです。また、地元の祭りに参加してもらうことで地元への愛を育て、市民同士の交流を深める役割も持っています。この地元愛や市民の交流が地元の商工業を育て、太田市の活性化に繋がるということを考え、毎年のようにねぶたを中心に頑張っております。また、20年近くやってきたということでねぶたの太鼓、笛の囃子がですね、少しずつではあるんですが、太田市に根付いてきています。太田市の新たな文化として認められつつあるねぶたを、太田市の伝統芸能と言われるまで発展させていきたいということもありまして、今現在、各団体を中心に努力しているところであります。

北本

埼玉県北本市役所産業振興課の加藤と申します。前にお出になった斜里さんですとか太田市さんは弘前市と縁のある町でございますけれど、北本市はこの弘前市とは何も縁がございません。そこでこのねぶたがどうして根付いたかということをお話ししたいと思っております。

平成3年に福島県会津坂下町と姉妹都市を結びました。この会津坂下町には人形ねぶた、組ねぶたがありまして、毎年8月にそのお祭りをしているそうです。それで、姉妹都市を結びまして、ずっと北本祭りもあったんですけども、その北本祭りは町の婦人会さんが流し踊りですとか、あとは地域の山車ですとか、それらを引いて北本祭りと称していたんですけども、その姉妹都市をきっかけに会津坂下町の組ねぶたが北本祭りの中に入っていました。そうしましたら、それを見た北本の市民の方が「おおすごい」ということになりまして、じゃあ地域でも取り組めないかということで、観光協会が中心となって、その時の観光協会の会長さんがとても津軽に縁のある方だったんでしょうね、ねぶたをやろうということになりまして、会津坂下に匹敵するねぶたを2機作りまして。それが北本に初めてねぶたがお目見えすることになったきっかけになります。ただ、これまで北本のお祭りが11月に行っていましたものですから、北本に特徴ということで取り入れております。

北本市にはコミュニティというのが各小学校圏域で1つずつあります。8校ありますので8コミュニティあります。北本市というのは東京に近いものですから、北本の人口が約7万おりますが、その70%が他市から、他県から入ってきた人たちです。地元の人はほとんどおりません。そんな中で、皆さんがコミュニティで何か1つの目標を持って向かうとみんな仲良くできるということはわかったんですね。それから段々と発展しまして、北本もねぶたが今年で17回目になりますが、25機出ます。友好都市の太田市さんよりちょっと多いですね。私としては、なぜねぶたを運行するかっていうのは、歴史が浅いですから、弘前さんとは肩を並べられませんけども、地域の住民の絆ということをテーマに運行させていただいております。まあ、お話しするのは良くわかりませんよね、一度も見たことないですから。で、私としては北本市を紹介ということでDVDにまとめてきましたので、それをご覧になっていただきたいと思っております。よろしくお願ひします。

秦野

神奈川県秦野市役所観光課の佐藤と申します。秦野市は人口17万人を抱える中核都市でありまして、新宿、横浜から電車で約1時間ですね。北方には神奈川の屋根である丹沢山塊を抱えておりまして、神奈川県内唯一の典型的な盆地を形成しております。地下は天然の水がめとなっております。丹沢の山々から水を蓄えており、その水の水量およそ3億トンと言われておりまして、秦野盆地湧水群として環境省の方から全国名水百選に選ばれております。また、

歴史の宝庫でもありまして、とりわけたばこ産業につきましては非常に有名なものがありまして、そのたばこ産業の先代の礎を築いてもらったものが秦野たばこ祭りということで、現在行われております。

そんな秦野市がなぜ弘前ねぶたを運行するようになったのかというと言いますと、先程も言いました秦野たばこ祭り、こちらの催し物の中の1つでありますランタン巡行の中で弘前ねぶたを運行しております。たばこ祭りの名称を聞いて、こんな禁煙の時代に不謹慎なネーミングだと思われる方もいらっしゃると思いますけども、決して喫煙を奨励しているようなお祭りではございませんので、そのことを一言添えさせていただきたいと思っております。たばこ祭りにつきましては9月の下旬、土曜、日曜の2日間で行っておりまして、市内の保育園児、幼稚園児からレクリエーション協会のメンバーなど1000人を超える踊り手が一糸乱れぬ踊りを披露するたばこ音頭1000人パレードや木製の巨大な火おこし機を使って点火時間を競うジャンボ火おこし綱引きコンテスト、また神輿が街中を練り歩く神輿パレードなど40を超える多彩な行事を2日間で展開しており、今年で64回目を迎えようとしております。例年20万人を超える人出で賑わっております。その中でですね、60回の記念開催時ですね。今から数えること4回前になりますけども、青森ねぶたを1機招へいしました。その翌年ですね、61回たばこ祭りで、非常にお恥ずかしい話ではございますが、60回の目玉はねぶた、じゃあ次の目玉はねぶたにしようよと非常に安易な考えでですね、何のつてもなく弘前市の観光物産課様、弘前観光コンベンション様に秦野市で本場の弘前ねぶたを運行したい、何とかお力をお貸し願えないかと非常に無礼な願いを突然持ちかけたこと、わかりましたと非常に力強いお返事をいただくことができ、堅田ねぶた愛好会様をご紹介いただき、秦野に本物の弘前ねぶたを運行することができるようになりました。

さて、実際にはどのような形で運行しているのかと言いますと、実は秦野たばこ祭りでは数ある催しの中でも人気のあるランタン巡行というものが行われておりまして、弘前ねぶたもその巡行に混じって隊列の先頭で運行をしております。台数としましては、ランタンが10機、弘前ねぶたが1機、計11機がですね、市街地4キロを練り歩きます。残念ながらですね、本場の弘前とは違いまして、お祭りの実行委員会の方ですべて制作をいたしまして、当日市内の中学生が引手として運行するといったような形式を取っております。

なぜねぶたを運行するのか、その目的は何なのかと非常に大きな話なんですけども。本物をわが町でも見ることができる、触れることができる、これが一番の目的になるのではないかと考えております。弘前にねぶたを見に行きたくても行けない人、故郷が弘前の人、様々な思いを持っての方々に対しまして、少しでもその気持ちを叶えられる一助になれば良いなと思いつつながら、毎年弘前ねぶたの運行をさせていただいてる次第でございます。

今井 ねぶた運行されている中でどういう問題が起きてきているか、どういう課題があるか、それに弘前がどういう関わりをしたらいいのか、それをちょっとお話しいただいて、それから今後のねぶたのあり方についてどのようにお考えになっているか、こういったことをお尋ねしたいと思っております。

斜里 斜里町でねぶたが運行されるようになった30年近く前を振り返りますと、弘前市のように300年近く続いてきたねぶた文化っていうものは当然斜里町においては全くありませんでした。そういうことでゼロからのスタートとなりました。そのような中で祭りを続けてくることができたのは、例えばお囃子であるとか、また絵について弘前の方々が指導をしてくれたから、このことに他ならないと思っております。弘前の方が毎年斜里まで来てくださるんです。このことは本当に弘前の方々の温かさを感じているところです。

斜里町における課題ですが、常にそのようにずっと教えていただいているんですけども、当然弘前と同じように運行できているわけではないと思っております。なぜならば、私も弘前のねぶたまつりを見ることができました。その時に運行の整然とした様子であるとか、そういう所を見て、本当に感動しました。そういう所で斜里の運行と弘前の運行には差があるってことがわかりました。ですから、例えばお囃子であるとか絵を描く方の人材の育成ってことが斜里町において課題となっております。

次に現状のお祭りや斜里のねぶたの将来をどのような形にしていきたいかという点ですが、

ねぶたまつりが30年近く続きました。それで小さい時からねぶたを斜里で経験してきた世代が大体30代になりました。そのことによって、このお祭りが斜里の町民に定着しました。斜里ではイベントがあまり長く続かない傾向にありまして、これだけの期間続いて、人がたくさん集まるお祭りというのは知床斜里ねぶたのみとなっております。ですから、このお祭りをさらに続けていくことによって、また斜里に来ていただけるお客様にも満足していただけるようなお祭りになればと思っています。さらに加えますと、ねぶたを通じての弘前市との交流を進めていければと思います。例えばねぶたであれば、団体として青年会議所さんであるとか、弘前から消防団の方々が来ていただいたりとか、弘前の運行団体の方が斜里に来ていただいたりということで交流が図られています。また団体以外にも、それぞれ個人で斜里に来てくださる方もいらっしゃいます。また逆に斜里からも弘前のねぶたまつりを見に来たい団体で行かれる方もいますし、斜里のねぶたを見て、弘前のねぶたを見たいという方も大勢いらっしゃって、弘前には斜里からたくさんの方が行っていると思います。そのことに加えて、ねぶたを見たら、弘前のさくらを見てみたいと思う方、そういう風に広がっていくと思いますし、斜里のねぶたに来ていただいた方も、冬の斜里町に来てみたいと思っていただければ幸いです。

最後に、弘前市への依頼や協力してほしいことなどという点ですが、まず重要無形民俗文化財であるねぶたを北海道の斜里の地で運行できることは友好都市の縁から過分のご配慮をいただいたものであると思っています。さらに、斜里におけるねぶたの運行は斜里の地で殉難した津軽藩士の慰霊のための巡行という意味合いも込められています。そして、このねぶた運行は弘前市の皆さんの温かいご協力によって運行されてるものです。ですから、依頼と言いますか、今後とも斜里のねぶたを温かい見守っていただければと思っています。そして引き続き、斜里のねぶたについて、ご指導くださいますようお願いする次第です。

太田

太田市で行われているねぶた祭りでの現在の問題点、課題ですが、まず1つ目についてですが、先程運行は国道を通行止めにして行うとお話ししました。この通行止めをする区間の一部500mぐらいがですね、尾島商店街という商店街になってます。この商店街については街路灯も多く、夜になっても比較的明るいイメージがあるんですけど、そこを外れた残りの1キロになりますと夜になると薄暗い印象があります。そのためですね、お祭り当日も観光客がこの商店街に集中してしまうということがあります。この商店街にはですね、弘前のねぶたまつりと違い、露天商が数多く並ぶこととなります。1. 5キロくらいある運行区間のうち500mくらいの間に、観覧をする人、露天商で買い物する人、ねぶたの運行等に携わる人、そういった人が一堂に集まってしまいます。人で溢れる場所をねぶたが人をかき分けながら進むような形になっています。そんな状況ですので、ねぶたを運行する際に常に危険と隣り合わせの状態というのが大きな問題です。

2つ目の問題点として、後継者問題というのがあります。ねぶたが始まった当初中心となっていたメンバーがそろそろ還暦を迎えるような年齢になってきております。ねぶたが根付いてきたとはいえ、笛、太鼓を自分でやってみたいという人はまだまだ少なく、特に笛に関しては音が出しにくいということもあり、なかなか増えないのが現状です。弘前市さんとかですと、各町内とかで小さいことからそういった笛等に触れ合う機会等があると思うんですが、太田市ではなかなかそういう機会がないので、小さい頃から太鼓や笛に触れる機会を増やさなきゃいけないというのも課題になります。

3つ目は団体数が年々減少しつつあるということです。ねぶた祭りに参加する団体は企業が母体となっている団体がほとんどです。ですので、昨今のような不景気になりますとその企業の中の予算でねぶたに関する部分が削られたり、なくなってしまうということ、出陣を2日間あるうちの1日にするとか、出陣を辞退するという団体も見受けられるようになりました。企業による出陣に頼るのではなくて、各町内でねぶたを持ってもらったり、そういった形で住民中心となったねぶたを増やすということも課題ではないかと考えております。

最後に、日程の問題ってのも最近出てまして、毎年8月14、15日に行ってるんですが、この日がちょうどお盆ということで、当初この日に日程を決めた際には、地元を離れていた人たちがお盆の時期であれば、太田市に帰ってきて地元の祭りを楽しめるということで、この時期に設定したんですけども。逆に考えると太田市のねぶたは企業の団体がほとんどですので、

お盆休みになると、その企業に勤めていた方が地元に戻ってしまうということで、人出を集めるのが大変だという話が出始めました。14、15で固定するのではなくて、たとえば8月の第2土日にするとか、そういったような形で日程を考えてみてはもらえないかということで、いろいろ意見も最近出ています。ただし、商店街が中心となっているお祭りですので、お盆休みでないと商店の方々が積極的に携われないということで、大きな問題になっています。

次に太田の祭り、将来どのような形にしたいかということなんですけども、ねふたと観光客が入り混じったような運行をしておりますので、できれば弘前市のような形でねふたと観光客がきっちり分かれるような運行をしたいと考えてます。入り混じった運行が太田のねふたの良い所だと言う方もいらっしゃるんですが、そういった入り混じった運行ですとねふたや囃子方、特に太田市は太鼓の上に女性とか乗りますので、そういった方の写真を撮りたくて、笛を吹いている行列の間を縫って写真を撮りに行ったりですとか、露天商もやっておりますのでねふたの行列の間を縫って買い物に行くとか、そういった方もいらっしゃいますので、その辺を考えると大分危険な状況ですので、いい方法を考えてねふたと観光客をうまく分けられればと思っております。

次に、太田市の出陣団体なんですけども、基本的にねふたというのは本体、太鼓、前燈籠、前ねふた、そういったものがあるんですが、太田のねふたは本体と太鼓、または本体だけという団体がほとんどです。それですでの、各団体がですね、弘前市のように前燈籠から囃子までご招待の行列を作れるようになってほしいというのも私の願いであります。

最後に、現在二車線の国道を止めて運行しております。ねふたが有名になるにつれ、だんだん手狭になっているような気もします。太田市内のは四車線の国道などもありますので、その四車線の道路をねふたが勇壮に運行する姿を見てみたいなと個人的には思ってます。伝統を守りつつ、地域の特色も出すという難しい所でもあるんですが、その辺を良い方向に持っていければと考えております。

最後に弘前との関わりということなんですけども、もちろん今後も弘前市とは友好都市として長くお付き合いさせていただくことになると思います。そういった状況の中で、今後、友好都市を結んで、何十周年とか、そういったこともあると思うんです。そういった際にはですね、ぜひ弘前のねふたの団体が太田のねふたに参加していただいたり、逆に太田市の団体が弘前のねふたに参加したりとか、そういった交流もできればいいんじゃないかと考えております。今回、こういう機会が弘前市を含め、5市町が集まりましたので、何かの機会があれば、5市町が弘前のねふたに集まって運行できればいいんじゃないかなと思っておりました。せっかくこういう機会を設けさせてもらいましたので、いろいろと今後も交流していければと思っております。

北本

先程DVDを見ていただきましたので、北本のお祭りってこういうものかなという様子を分かっていただけだと思います。まあ、17回ということですが、本当に取り組み始めたのはこの3年です。やはり見よう見まねでやっていることがですね、長続きしないということが分かりましたので、3年前からですね、地域のコミュニティの方、会長さんですとか、昨年は市議会を弘前に行っていただきましてね、本物を見て、勉強してほしいということをお伝えしました。やはり独自というのは大事ですけども、本物を見て、それから独自になるというのは良いプロセスかなと思っております。まあ、この件に関しましては、弘前市さんのご協力がありまして、ここまでやってまいりました。これからは、皆さんの絆を深めていくということが北本の目的でありますので、これからはですね、本物を学び、北本の独自のコミュニティの絆を大事にしたお祭りをずっと続けていきたいなと思っております。

北本市はですね、1つ良いことに市の予算は1銭も使いません。地域のコミュニティが各1軒ずつお金を出し合ってこのお祭りを作り上げてます。あと足りない所は市内の企業さんにお願ひしまして協賛金を集めております。そういった意味では、市としてはおいしいお祭りですので、長続きさせたいなという気はいたします。市民の人にとってはそれは大変でしょうけども、自分たちの手で作り上げているお祭りです。これならば長続きするのではないかなと思っております。これからはよろしくご指導お願いいたします。

秦野

秦野に関しましては、ねふたが運行し始めて3回目ということであって、まだまだこれから発展をしていくものだと思っております。そういった中でですね、人、物、場所といった問題

があるんですけども、特に場所の問題につきましては、非常に大きな課題になっておりまして、ランタン、ねふたですね、こちらの制作、保管場所につきまして、実は市内の大型店舗の屋根付の駐車場をお借りして、短い時間、限られたスペースで作業をしているといった状況になっております。それ以外にもですね、警察当局との道路使用関係等、さまざま問題ございますが、こちらの場所というのがねふた運行に関しての最大の課題ではないかと思っております。

将来的にどのような形にしたいかということで、まだ始まったばかりということで、お祭りというのはですね、伝統は伝統としてしっかりと守っていき、新しいものを拒まず積極的に取り入れ、見るものと参加するもの垣根のないお祭り、市民誰もが気軽に参加することができるお祭りにしていければ良いのではないかと思っております。

ねふたに関しましても、現在は1機のみでの運行となっておりますが、将来は機数を増やすことなどして、そういうことができればお祭りに花を添えることができるのではないかと考えております。また、お祭りというものは子供からお年寄りまで地域の人が参加し、見に来ます。今まで見に来た人が、次は私も参加したい、そしてそれが受け繋がれ、この流れがいずれ伝統と呼ばれるものになるのではないかと思っております。参加してみたい、見てみたいと魅力あるお祭りを展開して、いつの日か秦野のたばこ祭りは凄いぞと言われる日が来ることを願っております。

最後に、依頼や協力ということなんですけど、私の場合は縁がございまして、ここ数年弘前ねふたの運行に参加の方させていただいており、非常に貴重な体験をさせていただいております。今後につきましても、ご指導ご鞭撻の方をお願いできればと思っております。

第3部 ねぶたの未来を考える

パネルディスカッション「とことんかだれ！ねぶた馬鹿大集合」

パネリスト	弘前ねぶた参加団体協議会	会長	三上富秀栄 氏
	桔梗野ねぶた友の会	会長	松山 憲一 氏
	必殺ねぶた人	制作責任者	中川 俊一 氏
	弘前観光ボランティアガイドの会	会長	中谷 敏右 氏
	弘前ねぶた保存会	会長	清藤 哲夫 氏
コーディネーター	弘前ねぶた参加団体協議会	事務局長	波多野厚緑 氏



波多野 それでは、自己紹介も兼ねて、1人3分ほど、ねぶたの好きな所、ねぶたの良い所、メリットですね、この辺をお話をいただきたいと思います。

中谷 私は紺屋町で生まれましたが、紺屋町は昔からねぶたが盛んでした。ねぶたの囃子聞けばもうご飯は喉を通らない、それくらいやっぱり好きです。私は弘前観光ボランティアガイドをやっております。当然ねぶた期間中の晩も依頼があると案内しているんですけど、東京からお出でのお客さんですね、青森・五所川原、一度見たらもういいです。弘前は毎年必ず来ますというお客さんを案内してくれて頼まれました。で、弘前のねぶたはどこいいんですか？って尋ねたら、赤ちゃんからお年寄りまでみんな参加して、心をひとつにして、ヤーヤドーってやってるわけですね。祭りの原点がそこにあります。だから、好きなんですと言うお客さんがいました。

三上 ねぶたに対してはこの歳になってもまだまだ好きで若い人たちの中さ入ってやってるんですけども、私も死ぬまでねぶたからは離れられないと思ってます。そして、今現在、うちの方のねぶたの趣旨としては青少年健全育成、それから町民の親睦、これを掲げてやってま

す。我々町会の親睦とか青少年健全育成を考えれば、子供さんの名前覚えてれば、いろんな繋がりが出てきます。ねぶたの良いとこってのは、若い人から年いった方の話を聞くんで、子供たち素直です。私もねぶたにはまって、昔は非常に苦労したこともあります。今も若い人たちがみんな一所懸命先輩たちを見て、後継ぎとして動いています。今年も築城400年ということで盛り上がると思います。

松山 私も津軽人として生まれて、たげだばねぶたに関わらないで1年を無事に過ごしたいなどと毎年思っていますが、あちらこちらから笛の音が聞こえ、太鼓の音が聞こえますと、どうしても気持ちがじゃわめいしてしまうんです。我々の代になって今年出陣できれば29回目、足掛け30年の団体です。今ちょうど3歳の孫がいるんですが、その様子を見ますとやっぱりこれは津軽の血だなと、太鼓の音が聞こえれば冬でも春でも夏でも、とにかくまっすぐそこに向かっていきます。そういう思いを何とか地域の子供たちにも残していきたいという気持ちで30年前に我々の手で今の会を立ち上げました。ねぶたがあればまとまりやすいし、そういう意味では目に見えない、町会の各地域の核になってるのではないかなと自負しております。

中川 我々の団体は38年前に一番最初の代が制作を始めまして、僕の代で3代目。で、一番上の初代は60歳を超しまして、一番下が赤ん坊みたいな感じで、上から下まで広く長く続けたことで集まることができて大家族のような感じで制作をして、運行させていただいております。我々の団体は弘前では珍しいんですが、人形ねぶたを作っています。扇ねぶたを1台、人形ねぶたを2台作っているわけで、我々が考えるねぶたの良い所という、やはり皆で作るところ、皆で苦しんで、皆で協力して、100人位の超大家族のような感じで、それぞれが遠慮しないで怒りあったり、喧嘩したり、そんな人間関係をうまくこれからも繋げていければいいなという風に思っています。

波多野 先程、北本の囃子を聞いていて、ちょっと「ヤーヤドー」が短くてちょっと違和感を覚えたんですけども、パネリストの中谷先生、この辺ちょっと知っているようで知らないねぶたのうんちくということで、囃子の「ヤーヤドー」と「ラッセラーラッセラー」と「ヤッテマレヤッテマレ」の話をお話していただければと思います。

中谷 弘前は「ヤーヤドー」と、それは、大條さんの本でしたかな、弘前は剣道の道場が多くて、それが母体となってねぶた喧嘩というものがあつたりなんかする。剣道で打ち込むときにはヤーと打ち込むと、それを受けるときにはトーと受けると、それが「ヤーヤドー」になったんだというお話してました。それから青森の「ラッセラーラッセラーラッセラーラッセラー イッペラセイッペラセガガスコガン」っていうのが囃子なんです。ガガスコというのは鐘ですな、叩く。酒入れてもらうのにちょうど都合がいい。「イッペラセイッペラセ」っていうのは「酒出せ酒出せ」という、「一杯出せ一杯出せ」というそういう囃子があると聞いたと。五所川原の「ヤッテマレヤッテマレ」というのはどういうことなのか。皆さんご存知のとおり、太宰のうちだとか、大地主が北は多いんです。田植えをして、小作人が一所懸命やってるんですけど、地主は小作人を搾取します。小作人は食うものも困っている。で、うっぶん払って暴動が起きますと警察は地主側につくと当時は。そのうっぶんが溜まって、その捌け口ってというのは、認められたのはねぶたの時だと。だから地主を「ヤッテマレヤッテマレ」と言って発散していった。それが五所川原のヤッテマレという掛け声だということわかりましたね。そういう違いがあると。ただねぶたそのものの本家って言えばおかしいんですけど、全部弘前だということですね。そんなことも観光でお出でのお客さんにお話しております。

波多野 青森も揃いの衣装になってるからまあまあ様になってますけど、最近衣装問題も結構弘前も時々新聞紙上を賑わせていたりします。中川さんとこはグループのねぶたですんで、どちらかといえば衣装は全員揃えにくいパターンですよ。その辺はどういう風にクリアしてるっていうか、実は重要無形民俗文化財の中には運行っていうのを含んで無形文化財になってるわけですから、いま現状をお話いただければと思います。

中川 うちの団体は一応半纏があるんですけども若い子達が基本自由、ただ5人以上同じ服を着るなど。そして運行中はしっかりと仕事をしてくれと、何かを引くなり、太鼓を叩くなり、

何かをしてもらって、全体として統一感とまではいかないですけど、多少自由に若い子たちとの信頼関係を作りながら、うちはやらせてもらってます。

波多野 三上会長のところは特に統制が取れていて厳しいですけど、別な衣装で出てくるのは排除ですか。

三上 皆さん、茂森新町は厳しい厳しいとよく声聞こえるんですけども、全然厳しくありません。半纏着ないとねぶたに参加できませんよということも絶対しゃべってませんので。それでもおかしいもんで、みんな着れば自分も着たくなってくるんですよ。それがうちの方のねぶたの伝統って言いますか、今の若い人たちもそういうのを守ってずっとやっていますんで、まあ安心して若い人たちに任せてやっていますけども。よくうちの方しゃべられるんですけど敷居が高いとか、ほんとに自由ですよ。

波多野 松山さんところはどうです。

松山 あくまでも決まった形、それ以外は駄目ですよというようなことを徹底させるつもりであったんですが、普段学校を休んだり、ちょっとこゝろ悪たれる人たちがねぶたという1つの目標を持って仕事を与えますと、非常に一所懸命頑張ってくれるわけです。そういうのも見えますので、あながち恰好がどうだから排除とか、そういうような形は私自身の気持ちの中では、一概に服装が駄目だから来れば駄目だよというような切り方はしたくないなど。まあ、当然指導はしていかなざるを得ないのかなとは思っております。

清藤 私どもは素人ですけども、昔の絵ってというのは空間があったんですね。それから必ず顔には面がありましたね。ですから上手さというよりも絵としてのそういったことが的確かどうか、とりあえず見てくれというようなお話をしております。運行は、前ねぶたについてはこれは自由ですから、ときどきの世相と言いますかこういったものを大いに出していただいて、高張り提灯はなきやいけない、できれば先頭に運行責任者がいなきやいけないということと、その昔はその町に消防団がありますから消防団が前後ちゃんと守りますよということをつつ現わしてくださいよという、これも一応は見させていただいております。それから笛ですね。いっぱい笛を持ってる方がいてやっていると、1つの笛でちゃんときちんとしてやるところとあるんですね。先程ちょっと斜里と尾島の話が出ておりましたけども、あまりにもかけ離れているようなものがあるんですね。で、調べてみたら、いま弘前ねぶたと称してやっているのが全国で15、6箇所くらいあるんですね。あまりにも酷いようなルールで弘前ねぶたと称したものをやられるのは、いかななものかという風に思っています。ただ、それぞれの町の文化のあり方、環境があるわけでありますので、そのことについては私どもが口を挟むわけにはいきませんので、ぜひそれはそれで地元の方で、いろんな方で発展していけば良いだろうと思っております。弘前ねぶた保存会としては、曲がった方向に行かないように、しっかりと見ていく必要があるだろうという風に思っています。

波多野 どうしても今後止めた方が弘前ねぶたにとって良いよっていう部分をお聞きしたいと思います。

中谷 大きな太鼓に女性がはばかり乗って叩いていると、あれはとても見苦しい。で、考えてみますと今日の松木先生のお話にもありましたように、払いと祈りと願い、そんなものがみんな凝固された形でねぶたという祭りができてるわけですよ。しかも、弘前はですね、風格のある町というものを標ぼうしております。それから、ねぶた絵師の方にお問い合わせなんですけど、どうも見送り絵は鏡絵に比してうまくないというねぶたが何台か目にしたんです。絵師の方は日本画ももう一遍勉強してみてください。女性のこの美しさというものをもう一度女性の方々、若い方々考えてみてください。それが弘前の風格のある行事なんです。これから私たちは変えていいものと変えてはならないものは何かってことで、考えていくべきだろうと思えます。

三上 私も太鼓の上に上るとするのは非常に、神聖なものの上にまたがるのはまずいなど思って、うちの方も絶対上げてません。囃子の方も音の百選にも選ばれてるわけです。ですから、笛、太鼓、囃子の方もやっぱりそれなりの太鼓と囃子が合体して良い音色を出して、ねぶた運行するということを考えてみれば、音をわざわざ消しているような感じとなります。最近、非常にねぶたも大型化して、合同運行であってでも本当のねぶたの姿が見えないと。

開きが雲漢の下まで下がってきて、ねふた本体もほとんど下がって、横になって歩いてると。最近台数も多くなってきてますんで、弘前の場合は地域のねふたですので非常に難しい面もありますけども、協議会の方でも考えて、みなさんと協議しながら考えていきたいなどは思っております。

松山 私も囃子の方の話になるんですが、大体小っちゃい子供たち、一番初めに囃子の練習に来て何をやりたかっていうと、太鼓叩きたいって来ます。ただ太鼓叩くためには笛をきちっと吹けなければ太鼓もリズム狂います。町会でねふたやってますと色々な子供たち来ます。で、最初から楽しませますとねふたってこういうものかというように思いで、結局ねふたを甘く見てしまうわけです。我々は来た人間は大事にしたいなとは思いますが、その本当の苦しさ、そこをちゃんと理解して、それでも尚且つ付けてくれる子供たちが将来を担っていくほんとのねふた馬鹿になっていくのかなという思いは常に持ってますので、できれば、これからねふたに関わっていく皆さん方がそういう思いを持ちながら、ねふたに向かって行ければなど。人にもものを見せる以上、そこだけは一番いい形で見せれるような状況は私たちも努力していかなければならないのかなと思います。

中川 拡声器、ヤーヤドーかける時のあれが気になるなって思うんですよね。ヤーヤドーかける側が拡声器でかけて、返す方は地声って、返す方も返しにくくて声が小さくなったりして。また、全然違うことなんですけども、今の弘前ねふたまつりでこれだけは止めてほしいこと。9時半を過ぎた時にダッシュで10時までに運行のコースを抜けてくれ、あれが非常に、うちの団体最後の方に来ることが多いのでだんじりかっていうくらいのスピードで運行させられる。何か弘前全体で台数がここまで増えたのはねふたまつりとしては良いことだと思いますので、それを生かせる運行の新しい形態というのを主催者、参加団体協議会、各参加団体、みんなで考えていければいいなという風に思っています。

波多野 ねふたの将来についても語らないといけないわけでございます。弘前大学の調査によりますと町内で出してる参加団体の皆さんはちゃんと目的持ってるんですね。今までのお話の中で子供の教育の一環だというのが非常に明確にわかってるんですね。それに対して、グループのねふた、それから企業のねふたは観光でもない、伝統でもない、教育でもない、目的がいまいちはっきりしてないというのがアンケート結果に出ております。それから、観光というものに対しては、観光にとってもねふたは大事だという団体が非常に増えてきておるようです。この辺も含めて、今後、弘前ねふたがこうあるべきで、こういうところを守っていこうという部分も含めて、お話をちょうだいしたいと思います。

中谷 ねふたが大型化されすぎて、一番良い姿を見せていないんじゃないかと。黒石のねふたが人気出てるんですよ。つまり、田舎館、尾上、あれはみんな黒石の方に行きます。弘前みたいに大きくないんです。田んぼがあって、その向こう側に岩木山があって、岩木山がずっとみえるあたり、そこをねふたが通っていきますと絵になるんですね。ですから、大きなものを自慢するよりは、一番良く見える姿の大きさというんですか、それはねふた出す各町内、あるいは参加団体、もう一度考えて、きちんとした一番良いねふたの姿を見せられるということをご心得ておかないといけない。その辺はあと何か月かでねふた始まりますので、研究してみたいかがでしょうか。

三上 本当のねふたってというのは、雲漢の四角い所、あれから来てると思うんですよ。その本当のねふたの上に開き、扇、付いてきたものなんですね。ですから、それを隠すっていうのは本当のねふたではないんでないかなと思うわけです。鏡のねふた来て、後ろを見て、最後の見送り見て、哀愁を感じるというような気持ち、ねふたはそうでなければならぬでないかな。これは変える必要もないし、何十年、何百年続いてもいいんじゃないかなと私は思います。

松山 子供たちの育成ということに関して、交通事情、また地域のボランティアの力を借りるのが難しくなって、取りやめになってるというような所がかなりあります。ねふたに興味を示す子供たちが非常に少なくなってきてます。一番困るのは、親がねふたに出させないようにするというような状況も生まれております。我々やってる側も理解をしてもらえようような努力もしなければいけないし、少なくとも祭り期間中に弘前に足を踏み入れた時にねふた祭り

が醸し出す雰囲気みたいなのをもっともっとあってもいいのかなと。見てる人たちが何が面白かったのかみたいな意見をどんどんやってる我々に伝えてもらえたらなど。

中川

観光か、地域かとなれば、地域が先なんではないかなと。まず地域の人の繋がりにという部分をしっかりと築き、良いねぶたをやって、それを見てもらうということが必要なのではないかなと思っています。弘大の調査の方に関わらせてもらって、結果を見ていて思ったのが、「どちらとも言えない」という回答が非常に多いんですよ。やはりそこはそれぞれいろんな立場から議論をして、これからの方向性みたいなものを少し決めて固めていかなければならないのかなという風に思っています。最後に、地域と歩み寄りを我々が率先して行って、津軽地域全体でねぶた祭りをより良いものにしていって、それを観光として外の皆様に見せられるように頑張っていけたらいいなと考えています。